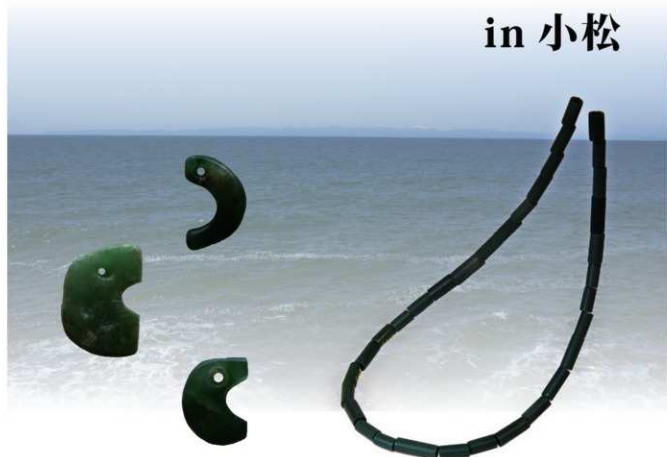




フォーラム

日本海を行き交う弥生の宝石 in 小松



平成26年10月18日(土) 13:00 ~ 17:00

会場：サイエンスヒルズこまつ ひとつものづくり科学館
(石川県小松市こまつの杜2番地)



石川県小松市原町1-7-8 電話 (0761)47-5713 e-mail:maibun@city.komatsu.lg.jp



八日市地方遺跡出土 管玉製作資料



八日市地方遺跡出土 勾玉



八日市地方遺跡出土 勾玉・管玉の組合わせ例

WEB 版未掲載

WEB 版未掲載

よつさき すぼ
吉崎・次場遺跡出土 管玉製作資料
〔石川県埋蔵文化財センター所蔵〕

吉崎・次場遺跡出土 勾玉製作資料
〔石川県埋蔵文化財センター所蔵〕

WEB 版未掲載

かどしちやしき
加戸下屋敷遺跡出土 玉つくり関連資料〔福井県教育委員会所蔵〕

開催にあたって

昨年、鳥取市において、青谷上寺地遺跡^{あおやかみじち}の交流をさぐることを目的とした同名のフォーラムが開催されました。フォーラムでは、小松市那谷・菩提^{な た ぼ だい}・滝ヶ原^{たきがはら}周辺で産出する碧玉^{へきぎよく}の広域流通が話題となり、ヒスイ流通の中継とともに、日本海交流において八日市地方遺跡^{やうかいちじかた}が果たした大きな役割にも議論が及びました。こうした最新の研究動向を小松市民にも知っていただくことを目的に、今回、同名のフォーラムを小松にて開催します。

小松開催のテーマとしては、八日市地方遺跡が拠点集落として果たした交流の原動力に、小松で産出する美しい緑色の碧玉がどのようにかかわったか、ヒスイ勾玉^{まがたま}と碧玉管玉^{くだたま}の製作技術から、八日市地方遺跡の「交流」と「ものづくり」の解明にせまりたいと考えています。

目次

開催にあたって・目次

フォーラム日程

講師紹介

【特別講演】

「九州弥生人の勾玉・管玉と北陸」 木下 尚子 ・ ・ ・ ・ ・ 4

【基調報告】

「弥生時代における玉づくりの展開」 米田 克彦 ・ ・ ・ ・ ・ 18

「青谷上寺地遺跡の玉づくり」 河合 章行 ・ ・ ・ ・ ・ 30

「八日市地方遺跡の玉づくり」 宮田 明 ・ ・ ・ ・ ・ 42

【補足資料】 ・ ・ ・ ・ ・ 46

フォーラム日程

- 13:00 開会
- 13:05 特別講演【60分】
「九州弥生人の勾玉・管玉と北陸」
講師：木下 尚子（熊本大学文学部教授）
- 14:05 休憩 【10分】
- 14:15 基調報告【60分（各20分）】
①「弥生時代における玉づくりの展開」米田克彦（岡山県古代吉備文化財センター）
②「青谷上寺地遺跡の玉づくり」河合章行（鳥取県埋蔵文化財センター）
③「八日市地方遺跡の玉づくり」宮田明（小松市埋蔵文化財センター）
- 15:15 休憩 【15分】
- 15:30 パネルディスカッション【90分】
・コーディネーター：木下尚子
・パネリスト：米田克彦、河合章行、宮田明
- 17:00 閉会

- ・質問用紙は座談会が始まる前に回収いたします。発表内容についてご意見・ご質問等ございましたら、ご記入ください。
- ・アンケート用紙はフォーラム終了後に回収いたします。ご協力よろしくお願い申し上げます。

講師紹介(発表順)

木下 尚子(きのした なおこ)

1954年東京都に生まれる。九州大学大学院 修了。

現在、熊本大学文学部 教授

主著・論文：「貿易陶磁からみた10世紀から16世紀における琉球列島・中国福建・台湾の関係」

『文学部論叢』第105号 熊本大学文学部 2014年

「装身具から威信財へ」『弥生時代の考古学4 古墳時代への胎動』同成社 2011年

『南島文化の研究一貝の道の考古学一』法政大学出版局 1996年

米田 克彦(よねだ かつひこ)

1975年島根県に生まれる。四国学院大学文学部 卒業。

現在、岡山県古代吉備文化財センター 主任

主著・論文：「古墳時代玉生産の変革と終焉」『考古学ジャーナル』No.567

ニューサイエンス社 2008年

「碧玉製管玉の分類と碧玉原産地」『古代吉備』第22集 古代吉備研究会 2000年

「出雲における古墳時代の玉生産」『島根県考古学会誌』第15集

島根県考古学会 1998年

河合 章行(かわい のりゆき)

1978年兵庫県に生まれる。熊本大学文学部 卒業。

現在、鳥取県埋蔵文化財センター 文化財主事

主著・論文：『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告9 玉・玉作関連資料』

鳥取県埋蔵文化財センター 2013年

「製作技術からみた骨角器の伝播」『動物考古学』第30号

動物考古学研究会 2013年

「弥生時代における骨角製漁撈具について—山陰地方を中心に—」

『先史学・考古学論究』5 龍田考古会 2010年

宮田 明(みやだ あきら)

1971年石川県に生まれる。富山大学人文学部 卒業。

現在、小松市文化財センター 主幹

主著・論文：『八日地方遺跡Ⅱ 第3部製玉編 第4部木器編』

小松市教育委員会 2014年(共著)

「八日市地方遺跡における管玉製作の技法的特徴」『八日市地方遺跡Ⅰ』

小松市教育委員会 2003年

九州弥生人の勾玉・管玉と北陸

—ヒスイ素材の流通をさぐる—

熊本大学文学部

木下尚子

はじめに—これまでにわかったこと

どんな時代でも、人は美しいものに惹かれ、これを身につけたいと願うものである。弥生時代、人々を飾ったもつとも一般的な「高級アクセサリ」は管玉であった。直径2mmから大きいものでは1cmもある、直線的に磨きあげられたモスグリーンの筒状の玉は、繋げられて耳飾りや頭飾、顔飾になった。

管玉は、もとは朝鮮半島から稲作文化とともに日本に伝えられた舶来の玉である。均一の形をした管玉は、溝を作って石を打ち割る技術（施溝分割技法）を駆使して生み出されたものであった。より多くの管玉を欲した弥生人はその製作技術を学び、同様の石材産地を国内に探した。その結果、出雲から加賀に至る地域に緑色凝灰岩⁽¹⁾や碧玉⁽²⁾の露頭が見つかり、弥生時代中期前半までに、沿岸地域に管玉の産地が次々と登場していった。原石から玉類を製作する行為を考古学で「玉作り」とよんでいる。玉作りの集落は、管玉を生産しこれを周辺の集落に輸出するようになってゆく。

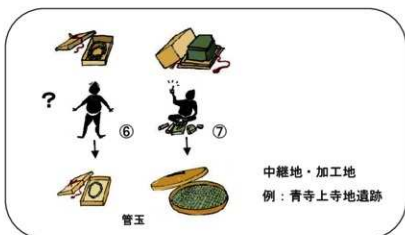
上質の碧玉を産出する露頭のある加賀地域の集落でも、管玉が作られた。小松市八日市地方遺跡はその代表である（福海ほか2003）。近年管玉石材の化学分析（藁科1988・1994・1997・2010・2013・2014）、製作技法や形状（大きさ）の研究（寺村編2004、深田・米田ほか2004、大賀2002・2011・2014、河合編2013）が進み、弥生時代の管玉の流通について概要が明らかになってきた。その中の注目すべき成果に、玉作りに用いた選別された碧玉素材が、加賀から山陰の玉作り集落に輸出されていたという事実がある。この実態は、本シンポジウムの青谷上寺地遺跡の報告で詳しく述べられるだろう。

図1は、加賀地域を原産地とする管玉石材の流通の状況を、これまでにわかったことをもとに、若干の想像をまじえて復元し、北陸から山陰東部を介して北部九州に向かう物品流通のあったことを示したものである。流通にかかわる代表的な遺跡（八日市地方遺跡、青谷上寺地遺跡）はいずれも潟湖に面した河川交通の要衝に位置しているので、物流は海路によっていた可能性が高い。

1. 本稿のテーマ

加賀の地は、碧玉の産地であると同時に、糸魚川地域で入手したヒスイ⁽³⁾の加工場所でもあった。糸魚川産ヒスイは碧玉の流通ルートにのって西方に搬入され、北部九州弥生社会で定形勾玉（図8の3）という弥生文化特有のアクセサリに加工された。

加賀の弥生人もヒスイ勾玉を作っていた。これらは形の特徴から半球型勾玉とよばれている（図7の1～7）。北部九州と北陸のヒスイ勾玉はそれぞれ特徴的で、その違いを比較すると表1のようになる。二つの地域の勾玉の相違は、その系譜に由来している。北部九州の勾玉のもとになった



- ① 原石の獲得
- ② 集落へ搬入
- ③ 剥離・分割
直方体材を作る
- ④ 管玉に仕上げる
- ⑤ 交易
- ⑥ 管玉の消費
- ⑦ 管玉の生産
- ⑧ 交易
- ⑨ 管玉の消費

原料石材産地の村落で玉作り用の素材が整えられ、管玉とともに中継地に搬入され、中継地で管玉が大量に生産され、これらの製品が北部九州に届いたと推定される。



図1 弥生時代の管玉生産と流通の模式図（中期）

表1 半球型勾玉と定形勾玉の比較

勾玉の分類名称	分布	形状の特徴	彫刻	大きさ	登場時期・系譜
 半球型勾玉	東日本に多い	角張る。C字形。対称形。		2.5cm以下が多い	・弥生中期前葉 ・系譜は不明
 定形勾玉	九州に多い	曲面でおわれる。非対称形。		3cm以上が多い	・弥生前期末～中期前葉 ・系譜は縄文時代の勾玉 

縄文時代の勾玉は大型である。これに対し、北陸の勾玉の系譜はよくわかっていない。今回の北陸の玉が主人公の機会に、なぜこのような形が登場したのかについて考えてみたい。

もう一つ考えたいことは、小さな勾玉をつくる産地から、どのようにして消費地で大きな勾玉が生まれたのか、である。北部九州の定形勾玉は北陸の半球型勾玉より大きいので、北部九州弥生人はこれに見合う大きなヒスイ素材を入手していたはずである。このことを確かめるには、どのような形のヒスイ素材がどのように動いていたかを知る必要がある。ヒスイ素材は数の限られた貴重品であったらしく、その多くが製品になっていかなか移動途中の足取りがつかめない。しかし北陸から管玉の素材とともに西に運ばれていたはずなので、管玉や玉作り遺跡を追いかければそのヒントが見つかるだろう。ヒスイ素材西漸の跡を追うことを本稿の二つ目のテーマとしたい。

2. 北部九州の管玉・勾玉消費の実態—北部九州の4遺跡

北陸の石を使った管玉やヒスイ勾玉がどのように使われていたのかを、最大消費地である北部九州でみてみよう。これらは有力者⁽⁴⁾の墓の副葬品として見つかることが多い。以下の4遺跡は管玉や勾玉が登場するときの状況を示す代表的な集団墓地である。

- ① 吉武遺跡群（福岡県福岡市西区）：「弥生前期末から中期初頭」⁽⁵⁾～後期
- ② 宇木汲田遺跡（佐賀県唐津市宇木）：弥生前期後葉～後期中葉
- ③ 中原遺跡（佐賀県唐津市中原）：弥生前期後葉～後期中葉



図2 遺跡の位置

- 1：中原遺跡 2：宇木汲田 3：吉武高木遺跡 4：田熊石畑遺跡

④ 田熊石畑遺跡（福岡県宗像市）：弥生中期前葉～中期中葉

①から③は北部九州に特有の甕棺墓地で、④はこの分布圏を外れた地域の木棺墓地である。

以下に各遺跡の管玉と勾玉の消費状況を紹介しますが、気を付けたいのは、同時に使われている管玉でも、複数の産地（朝鮮半島や山陰、北陸など）から届いたものが混じっているという事実である。これらは外見では区別しにくく弥生人は気にせず一緒に使用しているので、考古学では、化学分析によって北陸産の管玉を抽出している。結論からのべると、最初は朝鮮半島産の管玉が使われ、途中から北陸産の管玉が増えてくる。管玉の消費動向と、管玉の産地の動向を分けて読み取っていただきたい。

2. 1. 吉武高木遺跡群⁽⁶⁾

吉武高木遺跡群は福岡平野の西に接する早良平野を基盤とする拠点集落で、調査された墓は甕棺墓を主体に900基にのぼる。

図3-1と図3-2は、墓の副葬品の変化の傾向を時期別に示したものである。図3-1には管玉等玉類の出土傾向を、図3-2にはヒスイ勾玉と青銅の武器や鏡の出土傾向を示した。二つのグラフをみると、管玉・ヒスイ勾玉・青銅腕輪が前期末～中期初頭に一挙に登場していることがわかる。勾玉は蛍光X線分析の結果、糸魚川

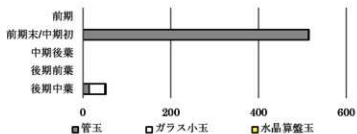


図3-1 吉武遺跡群出土副葬品 (管玉等 n:567)

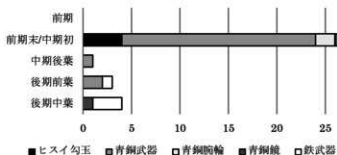


図3-2 吉武遺跡群出土副葬品 (ヒスイ勾玉・武器・鏡 n:35)

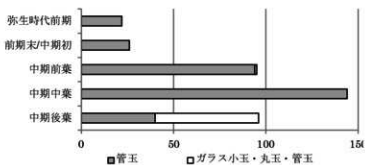


図4-1 宇木汲田遺跡出土副葬品 (管玉・ガラス玉類 n:383)

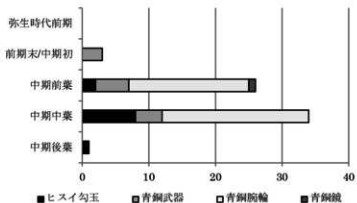


図4-2 宇木汲田遺跡出土副葬品

産であることが明らかにされた
(薬科 1985)。

2.2. 宇木汲田遺跡⁽⁷⁾

宇木汲田遺跡は、唐津湾を望む低地に営まれた、生活跡と墓地からなる弥生時代の遺跡である。

図 4-1 と図 4-2 は、墓の副葬品の変化の傾向を時期別に示したものである。管玉は前期に登場し、中期前葉に激増して中期中葉にピークとなり、中期後葉にガラス製の玉類が多くなっている。ヒスイ勾玉は中期前葉に登場し、中期中葉にピークとなり中期後葉には激減している。

宇木汲田遺跡のヒスイ勾玉と管玉は、蛍光 X 線等の分析がなされ、ヒスイは糸魚川産の可能性の高いこと、中期中葉の管玉に北陸産の石材によるものが存在することが示された(薬科 1997)⁽⁸⁾。図 4-3 は、この結果を時期別に示したものである。北陸産とみられる石材の管玉(女代南 B 遺物群)が中期中葉に多く登場している。中期前葉の類別は分析されていないが、北陸産石材の登場が中期前葉に遡る可能性を予想させる結果である。

2.3. 中原遺跡⁽⁹⁾

中原遺跡は、唐津湾に面した入江に形成された砂丘の微高地上の拠点集落遺跡で、甕棺墓 281 基が検出された。中期中葉に墓地数がもっとも多くなる。

副葬品の状況を見よう。図 5-1

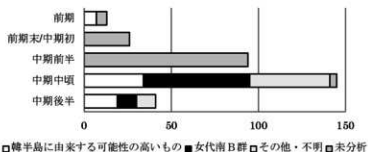


図4-3 宇木汲田遺跡の管玉石材
(出土数: 319 分析数: 260)

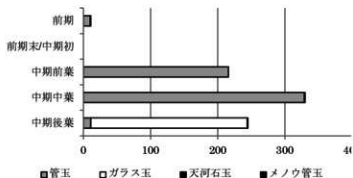


図5-1 中原遺跡出土副葬品
(管玉・ガラス玉・その他の玉類 n:802)

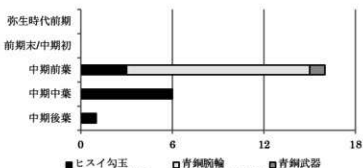


図5-2 中原遺跡出土副葬品
(ヒスイ勾玉・金属製品 n:23)

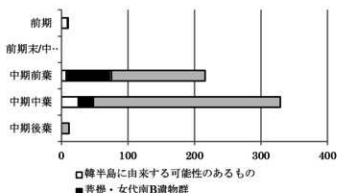


図5-3 中原遺跡の管玉素材 (n:566)

では管玉類が中期前葉に激増し、中期中葉にピークをなして中期後葉に激減している。ヒスイ勾玉(図5-2)は、中期前葉に青銅腕輪・青銅武器とともに登場し、中期中葉以降に継続することがわかる。

化学分析によると、中原遺跡のヒスイ勾玉は糸魚川産の可能性が高いという(薬科2010)。管玉の分析結果については、未分析のものを含めて図5-3にまとめた。北陸産管玉(女代南B遺物群)の登場が中期前葉であることがわかる。

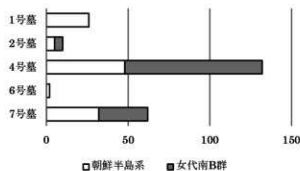


図6 田熊石畑遺跡出土管玉の分析 (n:232)

2.4. 田熊石畑遺跡⁽¹⁰⁾

田熊石畑遺跡は、宗像地域を北流する釣川中流に営まれた弥生時代の拠点集落遺跡で、近接して残された木棺墓7基に、青銅製武器15点、ヒスイ勾玉3点、管玉232点、ヒスイ等垂飾7点が伴っていた。甕棺墓地域の外でこれほどまとまった副葬品が検出されるのは極めて珍しいことである。墓の時期は中期初頭から前半におさまる(山田編2014)。

管玉の観察所見をもとに分析した大賀克彦氏は、これらにも朝鮮半島系の管玉と北陸に由来する可能性の高い管玉(女代南B群)の2タイプがあることを示した(大賀2014)。その割合を氏の報告にもとづいて墓ごとに示したのが図6である。

大賀氏は女代南B群の管玉を、大きさの傾向から北陸西部や近畿北部で作られた特徴のある東日本系と、大阪や鳥取西部以西で作られた特徴のある西日本系に分け、以下の重要な指摘をしている。「田熊石畑遺跡では東日本系が圧倒的に多い。しかし、北部九州全体では西日本系が圧倒的に卓越する。」宗像地域に北陸・近畿北部で作られたとみられる東日本系管玉が、甕棺墓地域より明らかに多くはいつていることは注意される⁽¹¹⁾。

2.5. 消費地の動向

北部九州の4遺跡の管玉と勾玉の消費状況からわかることをまとめると、以下のようになる。

- ① 管玉とヒスイ勾玉の使用は、弥生時代前期末～中期初頭に、青銅製品使用と軌を同じくして福岡の有力者層間で始まり、やや遅れて唐津と宗像でも使用が始まった。
- ② 北陸産石材を使った管玉は、弥生中期前葉に北部九州に登場した。
- ③ 管玉の加工地は大半が鳥取西部以西だが、弥生中期前葉には北陸・近畿北部で加工された管玉が宗像地域に入ってきている。

管玉とヒスイ勾玉を欲したのは、北部九州の権力者層であった。北陸産石材を使った国産管玉が弥生中期前葉に北部九州に登場していることは、その石材搬出を担ったとみられる八日市地方遺跡が中期前葉から発展することとよく対応する。北陸産石材を使った国産管玉の多くは大阪や鳥取西部以西で作られたとみられるが、北陸・近畿北部、あるいは鳥取東部(青谷上寺地遺跡など)で加工されたものも含まれていた。

3. ヒスイ素材の流通

3.1. ヒスイ素材の存在

ここでいうヒスイ素材とは、管玉の加工と同様に施溝分割技法によって緑色の部分が抽出された勾玉用の素材をさす⁽¹²⁾。八日市地方遺跡には、平面形が半月形で断面形が方形をなす長さが2cm以下に整えられたヒスイ素材がみられ、同じ遺跡で出土する塊型勾玉とよく対応する(図7の1~7)。北部九州用のヒスイ勾玉素材には、より大きいものが必要であるが、八日市地方遺跡にこうしたヒスイ素材は残っていない。

鳥取県琴浦町の南原千軒遺跡は、北陸産碧玉による管玉の生産を行っていた玉作り遺跡である(君嶋編2005)。ここで施溝分割痕跡をのこすヒスイ素材が1点みついている(図7の8)。それは3.5cm×3.1cm×1.2cmの大ききでエメラルドグリーン⁽¹³⁾の石材で、一般的な半塊型勾玉を明らかに上回る大ききのヒスイ素材である。出土状況からは時期を厳密に特定できない難があるが、報告書では関連遺構の時期から、弥生中期前葉から中葉に比定している。

北部九州でも類例が知られる。福岡市桑原飛櫛貝塚で、施溝分割痕跡を明瞭にのこすヒスイ素材が1点みついている(図7の9)(井澤1996、山崎2014)。それは淡いエメラルドグリーン⁽¹⁴⁾の良質なヒスイで、3.8cm×2.3cm×1.3cmの厚い板状をなし、二箇所の溝により平面形が三角形に整えられている。土のフルイかけ作業で検出されたものとされる。桑原飛櫛貝塚本体は縄文時代後期初頭の遺跡で、本例も同時期の可能性があるとされる。しかし北部九州で縄文後期初頭のヒスイ勾玉例はみられず、この時期にヒスイを施溝分割する技法も知られていない。遺跡で弥生土器が出土しているという調査者の所見があることを考慮すると、現在のところ弥生時代の遺物の混入とみる方が理解しやすい⁽¹⁵⁾。

先に紹介した福岡県宗像市田熊石畑遺跡においても、ヒスイ素材が1点表面採集されている(図7の10)。若草色の良質のヒスイで、3.1cm×1.1cm×1.0cmの直方体をなし、一辺に施溝分割痕を残す。四面に粗く研磨した面が認められることから、この状態で素材として流通していたと判断される。採集品のため時期の特定が難しいが、調査者の説明では弥生時代の遺構のある地区で採集され、弥生時代のものである可能性が高いという。東日本系の管玉の多いこの遺跡に、ヒスイ素材があるのは理解しやすい現象である。

以上3点がこれまでに知られる弥生時代の可能性のあるヒスイ素材である⁽¹⁶⁾。時期比定に不安定な面を含む点が惜しまれるが、いずれも施溝分割された3cmを超える大ききのヒスイ素材であり、北陸産碧玉とともに北部九州にもたらされていた流通の一端を示すと見ておきたい。

3.2 ヒスイ素材以前

八日市地方遺跡に半塊型勾玉とは異なる形状の、一端に孔をあけた三角錐形のヒスイが1点ある(図7の11)。エメラルドグリーン⁽¹⁷⁾の非常に良質なもので、穿孔されていることを除けば、ほとんど無加工である⁽¹⁸⁾。これは遺跡の最下層でたもので弥生前期中段階に相当するという。おそらく自然の転石をそのまま使ったものだろう。

これとよく似た形状のヒスイで、一箇所に袂りをいれた垂飾が、佐賀県唐津市の大友遺跡の弥生前期後半の墓から出土している(図7の12)(東中川編1981)⁽¹⁹⁾。大友のヒスイ製品は、八日市地方遺跡の三角錐形のヒスイをもとにしたとみれば考えやすく、両者は時期的にも対応する。

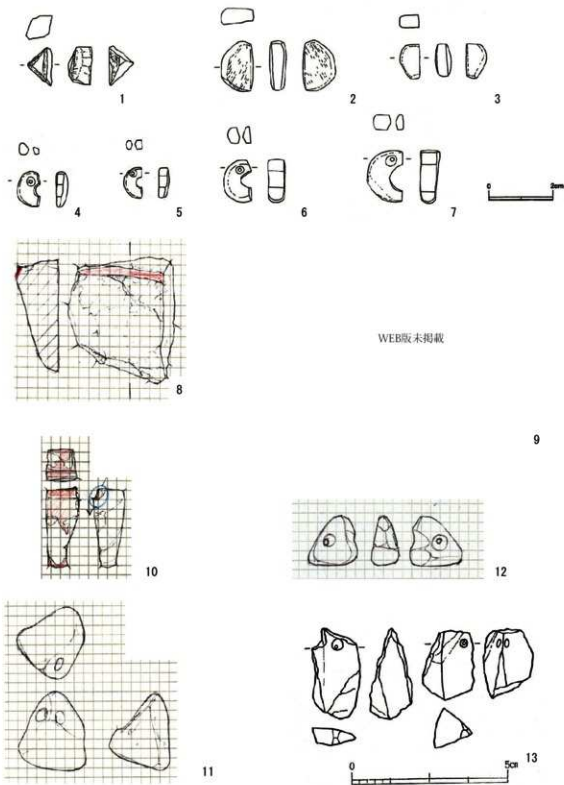


図7 ヒスイ勾玉とヒスイ素材

1～3：ヒスイ素材、4～7：半球型勾玉、8～11・13：ヒスイ素材、12：ヒスイ垂飾

1～8・11：八日市地方遺跡、8：桑原飛櫛遺跡、9：南原千軒遺跡、10：田熊石畑遺跡、12：大友遺跡、

13：大塚遺跡（1～7は福海ほか2003：p.279、13は寺脇編1988：p.97引用）

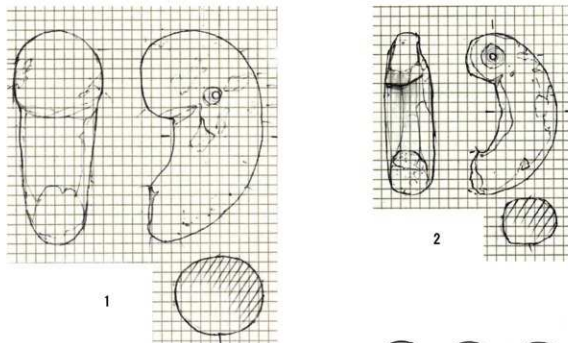
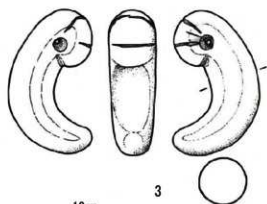


図8 定形勾玉モデルと定形勾玉

- 1・2: 凝灰岩製勾玉、3: ヒスイ勾玉
 1・2: 八日市地方遺跡、3: 宇木汲田遺跡



同様の例が新潟県糸魚川市の大塚遺跡にもみられる(図7の13)。大塚遺跡は弥生前期に玉作りを行っていた数少ない遺跡で、「硬玉を石材とする4点のうち3点までが、全く研磨を加えない荒削りの状態で穿孔されている事」が報告されている(寺崎編1988, p.127)。穿孔は八日市地方遺跡のものと同じく、三角形の両側面を繋いで両側からなされている。こうしたものが、弥生時代前期に、ヒスイ製品の素材として、北部九州にもたらされていたとみることができる。

3.3 北陸の注文生産

八日市地方遺跡には、装身具用の碧玉管玉やヒスイ勾玉、蛇紋岩勾玉のほか、凝灰岩質砂岩でつくられた大型の勾玉が6点ある(図8の1・2)。みな白っぽい灰色をなした粗質の加工品で、大きさは3cmから7cmに及び、穿孔が途中で終わるものや省略されたものもあって、実用の装身具ではない。注目されるのはこの中に九州の定形勾玉の形状の特徴をはっきりと備えるもののある点である。半袂型のヒスイ勾玉とは別個に、こうした九州の大型勾玉を模した粗製品のある

表2 御経塚遺跡の勾玉と八日市地方遺跡の勾玉の比較

遺跡名	勾玉の形状	ヒスイの質	勾玉の大きさ（長径）	石材に占めるヒスイの割合
御経塚遺跡	彫刻のあるものが多く、変化に富む	緑色の多いものや白色のものなど変化に富む	9~24mm（14例） 38mm（1例）	33%
八日市地方遺跡	ほぼ均一な形状	緑色で透明感のあるものが多い	9~20mm（10例） 25~29mm（2例）* *非ヒスイ	83%

ことをどう考えればよいだろうか。

私はこれを、九州からのヒスイ素材の注文のためのモデルではないかと思っている。定形勾玉を象った一連の加工品の存在は、このような形状の大型の勾玉に見合うヒスイ素材の需要を八日市地方の人々が意識していた証左ではないだろうか。ヒスイ産地に近い北陸の玉作り遺跡では、九州の注文に応じてヒスイ素材を作っており、その実物が先にみた施溝分割痕跡のあるヒスイ素材ではないか。こうした素材が八日市地方遺跡に残されていないのは、多くの優品を輸出してしまっているからだろう。

以上から、ヒスイ素材の登場を以下のように整理しておこう。弥生時代前期に、縄文時代の伝統をひく糸魚川の遺跡でヒスイの生産が継続し、そこで整えられた三角錐状のヒスイが加賀の集落を介して北部九州に運ばれた。北部九州人はこれをもとに垂飾等をつくり、弥生中期前葉に定形勾玉を作り出した。北部九州弥生人は定形勾玉に対応する大型の素材を要求したため、北陸ではこれに見合う大きさのヒスイ素材を、施溝分割技法によって要領よく生産し流通させた。この過程で、北陸には九州の定形勾玉モデルが備わり、効率的なヒスイ素材の提供が継続した。

4. 半球型勾玉の謎

北陸に半球型勾玉が登場したのはなぜなのだろう。北部九州の勾玉が縄文時代の勾玉の伝統の上に作られたこと（木下 1987、河村 2000、大賀 2011）や、糸魚川で縄文的玉作りが継続していたことを考えると、弥生時代の北陸に登場した半球型勾玉も、この地の縄文時代の勾玉の伝統から生まれたと考えるのが穏当だろう。

石川県野々市市の御経塚遺跡は、縄文後期後半から晩期全般にわたる拠点集落で、多くの石製装身具が伴っているので、このことを考える絶好の資料である（高堀勝喜編 1983）。報告書によると、出土総数は52で、それらは丸玉、長玉、勾玉形のもの、垂飾に分けられている。多彩な形状の玉類が存在し、これらが組み合せて使われていたようである。石材の半分近くをヒスイが占め、ヒスイの利用が盛んであったことが窺える。

表2は、御経塚遺跡の勾玉と八日市地方遺跡の勾玉を比較したものである。これをみると、両者が、勾玉の形状や質、ヒスイへの執着度においてかなり異なっていることがわかる。弥生の方が緑色で透明なヒスイを撰ぶことに熱心で、形の均一さにも固執していたといえそうである。この違いは、弥生人が施溝分割技法を習得していたことに因っている。施溝分割技法を使うと、

大きなヒスイから緑色の良質な部分だけを計画的に取り出すことができ、また同じ形状の素材をつくることができる。縄文の多彩な形状の勾玉が、シンプルな半珠型になったことの原因の一つは、その加工技術の差にあったといえよう。

二つの勾玉には共通点もある。八日市地方遺跡のヒスイ勾玉の大きさは 1~2cm にまとまり、御経塚遺跡の勾玉の大きさとほとんど同じである。したがって勾玉だけをみれば、北陸弥生人の勾玉は、縄文時代の勾玉を基本に新たな技術で作られたものといえそうである。しかし縄文人の玉類は勾玉のほかにもさまざまな形状の玉が組み合いながら成り立っていた。最も特徴的なものは丸玉であり、横位に凹線のはいる特徴的な細長い垂飾も伴った。こうしたさまざまな玉類が弥生時代には一挙になくなり、シンプルな半珠型勾玉だけになっている点は、縄文時代の玉類と弥生時代のそれとの間に、装身のものに対する思想的な変化のあったことを示唆する。こうしたさまざまな玉類を止揚して登場したのが半珠型勾玉であるとするならば、この形からどのような意味を引き出せばよいのだろうか。

ここから先の問いは、北陸の先史文化になじみの浅い私にはいささか大きな問題である。今回のシンポジウムで地元の方々の考えを伺い、解決の糸口のみつけたいと思っている。

注

- (1) 2mm 以下の細かい火山灰が固まったもの（凝灰岩）のうち、変質して緑色をおびたもの。軟質のものと硬質のものがある。Ggreen tuff
- (2) 微細な石英の結晶が集まってできた硬質の鉱物のこと。Jasper
- (3) ひすい輝石という鉱物が主体になって集まった岩石のこと。厳密にはひすい輝石の容積が 90%以上あるものをいう。硬玉、Jadeite、(岩澤 2004)
- (4) ここでは青銅武器、青銅鏡、青銅腕輪などが墓に副葬されている人物を有力者とみている。
- (5) 北部九州の甕棺編年で金海式期と城ノ越式期を指す。従来前者が前期末、後者が中期初頭に編年されていたが、前者に中期初頭の副葬壺が伴うことが明らかとなったため、便宜的にこのように表示する。
- (6) 吉武遺跡群は、福岡平野の西に続く早良平野にある集落と墓地からなる弥生時代の遺跡で、平野を南北に貫流する室見川中流左岸の扇状地に位置している。墓地は複数の地区に分かれて存在し、高木地区（中期初頭の甕棺墓と木棺墓）、大石地区（前期末から中期後葉の甕棺墓を主体）、極渡地区（中期後葉から後期の埴土墓）には、それぞれに豊富な副葬品を伴う墓が存在する。墓地周辺には同時期の集落が展開し、高殿とされる掘立柱建物も検出された。1981 年から 1985 年に、福岡市教育委員会によって発掘調査が行われた（力武・横山編 1996、1998、1999、2000）。
- (7) 宇木坂田遺跡は、1957 年以降 1982 年までに甕棺墓 129 基、土壇墓 3 基が調査され（唐津湾周辺遺跡調査会 1982）、その後 1983 年に唐津市、1984 年に九州大学によって発掘調査された（田崎 1986）。
- (8) 管玉は蛍光 X 線分析と ESR 法（原石に含まれているイオンや常磁性性種を分析し、その信号から産地を区別する指標を見付ける方法（藁科 1997、p.15））による分析結果をあわせて、総合的に判断された。260 個のうちの 188 個が分析され、その結果は以下のとおりである。
 - A 韓半島に由来する可能性の高いもの
 - B 女代南 B 遺物群とされるグループ。
 - C その他および不明なもの。

上記 B は、兵庫県豊岡市女代神社南遺跡で主体的に使用されている原産地不明の碧玉グループで、材質分析に際して薬科氏により設定されたものである(薬科 1994)。女代南 B 遺物群は、石川県小松市菩提で類似した碧玉が確認されており、北陸が原産地であった可能性が指摘されている(薬科 2013, p.122)。

- (9) 中原遺跡は、弥生時代から平安時代に至る時期の複合遺跡である。1965 年以降複数回の調査が行われているが、1999 年から 2005 年には佐賀県教育委員会によって砂丘上の豊楢墓地在全面的に調査された(小松編 2010, 2011)。
- (10) 田熊石畑遺跡は沖積平野上の独立の台地上に立地する弥生時代前期後半から中期の環濠集落である。このほか古墳時代の掘立柱建物 25 棟、中世の遺構が検出されている。2008 年から 2009 年に発掘調査が実施された。
- (11) 同様の東日本系管玉は、唐津市中原遺跡でも 4 点存在すると指摘されている(大賀 2010, p.285)。出土した管玉総数からみるとごく僅かな数である。
- (12) 弥生勾玉が施溝分割による素材から作られていることを指摘したのは河村好光氏である。この指摘によって、その後の研究において北陸と九州の勾玉の関係を具体的に論じる視点が拓け、その後の研究が進展した(河村 2000)。
- (13) 桑原飛楯遺跡におけるヒスイ素材の出土状況について、再確認中である。
- (14) このほかに岡山県総社市窪木・宮後で出土したヒスイ勾玉未成品も知られるが、時期が不明であるためここでは取りあげないことにする。
- (15) 表面に艶をもつので、布などで磨いた可能性はあるが、研磨面は認められない。
- (16) 大友遺跡は弥生早期から中期に至る集団墓地で、計 6 回の調査が実施され、弥生時代の墓 189 基が調査された(東中川編 1981、宮本編 2001、宮本編 2003)。ヒスイ製品は第 4 次調査の 44 号豊楢墓に伴った。ヒスイ製品が副葬された墓は 1 基のみである。

文献

- 井澤洋一編 1996『桑原遺跡群 2 飛楯貝塚第 1 次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 480 集、福岡市教育委員会
- 大賀克彦 2002『弥生・古墳時代の玉』『考古資料大観』第 9 巻、小学館、pp.313~320
- 大賀克彦 2010『女代南 B 群碧玉製管玉に関する認識』『中原遺跡Ⅳ』、佐賀県教育委員会、pp.280~293
- 大賀克彦 2011『弥生時代における玉類の生産と流通』『講座日本の考古学 5』、青木書店、pp.707~730
- 大賀克彦 2014『田熊石畑遺跡木棺墓群出土の玉類』『国史跡 田熊石畑遺跡』宗像市教育委員会、pp.178~186
- 河合章行編 2013『青谷上寺地遺跡出土品中期研究報告 9 玉・玉作関連資料』鳥取県埋蔵文化財調査センター
- 河村好光 2000『ヒスイ勾玉の誕生』『考古学研究』第 47 巻第 3 号、pp.44~62
- 唐津湾周辺遺跡調査会(岡崎敬代表) 1982、p.241
- 木下尚子 1989『弥生定形勾玉考』『東アジアの考古と歴史』、同朋社、pp.541~592
- 君嶋俊行編 2005『鳥取県東伯郡琴浦町南原千軒遺跡』鳥取県埋蔵文化財調査報告書 100、財団法人取県埋蔵文化財団・国土交通省倉吉河川国道事務所
- 小松権編 2010『中原遺跡Ⅳ 11 区・13 区の弥生時代豊楢墓の調査』西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書(7)、佐賀県文化財調査報告書第 182 集、佐賀県教育委員会
- 小松権編 2011『中原遺跡Ⅴ 11 区~13 区の弥生時代・古墳時代墳墓の調査』西九州自動車道建設に係る文化財調

- 査報告書(9)、佐賀県文化財調査報告書第187集、佐賀県教育委員会
- 高橋勝喜編1983『野々市町御経塚遺跡』野々市町教育委員会
- 寺崎祐助1988『北陸自動車道 糸魚川地区発掘調査報告書Ⅳ 原山遺跡・大塚遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集、新潟県教育委員会
- 東中川忠美編1981『大友遺跡』呼子町文化財調査報告書第1集、呼子町強度史研究会
- 深田浩・松本岩雄・増田浩太・米田克彦・丹羽野裕2004『古代出雲における玉作の研究Ⅰ』、鳥根県古代文化センター
- 福海貴子・橋本正博・宮田明2003『八日市地方遺跡Ⅰ-小松駅東土地区画整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-』小松市教育委員会
- 宮本一夫編2001『佐賀県大友遺跡Ⅱ-弥生墓地の発掘調査-』平成12年文部科学省科学研究費補助金特定領域研究A(1) 考古学資料集30
- 宮本一夫2003『佐賀県大友遺跡-弥生墓地の発掘調査-』平成12年文部科学省科学研究費補助金特定領域研究A(1) 考古学資料集16
- 山崎純男2014「4-6 熊本県頭地下手遺跡出土の擦切石斧について」『頭地下手遺跡』熊本県文化財調査報告第297集、pp.387~398
- 山田広幸編2014『国史跡 田熊石加遺跡-福岡県宗像市田熊所在の発掘調査報告-』宗像市文化財調査報告書第71集、宗像市教育委員会
- 力武卓治・横山邦雄編1996『古武遺跡群Ⅶ』飯盛・吉武園場整備事業関係調査報告書2、福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集、福岡市教育委員会
- 力武卓治・横山邦雄編1998『古武遺跡群Ⅹ』飯盛・吉武園場整備事業関係調査報告書4-弥生時代墳墓の報告1-、福岡市埋蔵文化財調査報告書第580集、福岡市教育委員会
- 力武卓治・横山邦雄編1999『古武遺跡群Ⅺ』飯盛・吉武園場整備事業関係調査報告書5-弥生時代墳墓の報告2-、福岡市埋蔵文化財調査報告書第600集、福岡市教育委員会
- 力武卓治・横山邦雄編2000『古武遺跡群Ⅻ』飯盛・吉武園場整備事業関係調査報告書6-弥生時代墳墓の報告3-、福岡市埋蔵文化財調査報告書第650集、福岡市教育委員会
- 藁科哲男1988「ヒスイの原産地を探る」『古代翡翠文化の謎』新人物往来社、pp.136~160
- 藁科哲男1994『玉類の原産地分析から考察する玉類の分布圏の研究』平成5年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書)
- 藁科哲男1997「宇木汲田遺跡出土のヒスイ製勾玉、碧玉製管玉の産地分析」『研究紀要』第22集、佐賀県立博物館・美術館、pp.1~36
- 藁科哲男2010「中原遺跡出土石製玉類の産地分析」『中原遺跡Ⅴ 11区~13区の弥生時代・古墳時代墳墓の調査』佐賀県文化財調査報告書第182集、佐賀県教育委員会、pp.321~366
- 藁科哲男2013「石材等の原産地分析」『青谷上寺地遺跡出土品中期研究報告9 玉・玉作関連資料』鳥取県埋蔵文化財調査センター、pp.119~158
- 藁科哲男2014「土井ヶ浜遺跡出土石製玉類の石材原産地分析」『土井ヶ浜遺跡 第1次~第12次発掘調査報告書』下関市教育委員会・土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム、pp.67~113

弥生時代における玉つくりの展開

岡山県古代吉備文化財センター

米田 克彦

1 弥生時代玉類の特徴

弥生時代の玉類は、管玉、勾玉、小玉で主に構成され、まれに算盤玉、切子玉、丸玉、棗玉がある。玉の形と材質の関係をみると、管玉は緑色凝灰岩・碧玉・鉄石英・ガラス、勾玉はヒスイ・ガラス、小玉はガラス、算盤玉は水晶というように、形と材質に相関性があり、縄文時代や古墳時代と比べて一定のルールが固く守られている。さらに材質は色と一体の関係にもあり、ヒスイ、緑色凝灰岩、碧玉は緑色、ガラスは青色と緑色、水晶は白色透明を呈する。玉類に映された「青（緑色・青色）」は山や草木、空、海、「白」は光や雲などを具体的に連想させ、これらは生活に欠くことのできない自然環境や風土の色と言える。弥生時代に生きた人々は、玉の形がもつ祭祀・呪的意味、材質がもつ特質と希少性に加え、こうした色から抽象的にイメージされる生命力や再生、浄化などに対する呪力や願いを玉に込めて作り、それを求めて身につけ、生命が体内に宿ることを強く信じたと考える（米田 2009）。

2 弥生時代玉作遺跡の分布と変遷

弥生時代玉作遺跡は127か所が現在確認されており、その分布は時期ごとにめまぐるしく変化する（河村 2010、図1）。

弥生時代前期の玉作遺跡は山陰と中部瀬戸内で散発的に出現した。その後、玉作遺跡は本格的な稲作文化の拡散に伴い、中期前葉までに近畿北部から北陸西部、東海にまで広がった。

中期中葉になると、玉作遺跡が大幅に急増するとともに、分布範囲も山陰から北陸東部及び佐渡、近畿南部、東海まで拡散する。このことは各地域の集落で玉つくりが手工業生産の一つとして営まれたこと、つまり玉が特定個人だけではなく、幅広い成員にも玉を装身する風習が広まったものと理解できる。ただし、当該期の玉作遺跡は中期後葉をもって衰退するところが多い。その背景には石川県菩提・那谷産碧玉やこれと同じ性質をもつ女代南B群碧玉の流通が著しく減ったことに大きく起因するものと考えられる。

後期になり玉作遺跡は日本海沿岸の北陸と山陰に濃密に分布する。当該期は中期に多用された石川県菩提・那谷産碧玉や女代南B群碧玉に替わって新たに緑色凝灰岩や島根県花仙山産碧玉を使用し、さらに打割具や穿孔具として鉄器を使用することから、中期と比べて玉生産の内容や技術が大きく異なる。つまり、中期から後期にかけて玉つくりが連続と継続している遺跡は皆無に近く、後期になって玉の生産システムが再編された可能性が高い。弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけては、それまで玉つくりが伝統的かつ主体的に行われることのなかった北部九州にも玉作遺跡が局地的に分布するようになる。北部九州では花仙山産碧玉が搬入された遺跡が多いことから、玉材流通や玉作技術は山陰の影響を強く受けて玉つくりが営まれた。

3 玉つくりの技術と変遷

(1) 管玉

弥生時代の管玉には緑色凝灰岩、碧玉、鉄石英、ガラスの4種の材質がある。緑色凝灰岩は日本海沿岸の北海道から山陰にかけて広範囲に産出する。碧玉は日本列島で11か所の原産地が現在確認されているが、弥生時代に主に使用されたものは、新潟県猿八産（鉄石英を伴う）、石川県菩提・那谷産、兵庫県玉谷産、島根県花仙山産、産地不明の原石群である未定C群、女代南B群に限定される（藁科1994、図2）。このうち未定C群碧玉で作られた管玉は、日本列島では弥生時代前期、後期、古墳時代前期に断続的に流通するものの、生産を示す資料は明確でなく、青銅器時代の朝鮮半島を中心に継続的に数多く流通することから、朝鮮半島産の可能性が高い（李ほか2008）。管玉に使用された碧玉原産地・原石群は時期や地域によって変化するとともに、管玉の形態変化とも連動する（米田2000）。このことは、管玉の製作技術が碧玉の原産地・原石群と相関性が深く、石材の流通と技術伝播が一体的に行われたうえで管玉が生産されたことが背景にあった（大賀2001、図3）。

管玉の製作は、①原石→②荒割→③形削→④側面調整→⑤研磨→⑥穿孔→⑦仕上げの工程をたどる。ただ、製作技術の細部には石材や工具によって差異があり、各遺跡・工房ごとに技術を共有又は改良して特徴的な製作技術を形成する（寺村1966・1980・1990）。そのため、弥生時代の管玉製作技術は各々の製作技法が存在するが、各製作技法に共通する特徴を捉えることにより、長瀬高浜技法、西川津技法、大中の湖技法、新穂技法、加賀技法の5通りに大別することができる（図5、廣瀬2009）。

前期の管玉製作技術には、長瀬高浜技法と西川津技法がある（清水1982、寺村1990）。

長瀬高浜技法は、軟質の緑色凝灰岩の原石や石核から打撃分割により適当な素材を作出し、瑪瑙製打製石針によって穿孔する。この技法は中期以降には継続せず、初現的で空間・時間的にも限定された。製品は寸胴で小形短身のものが多く、規格性に乏しい。

西川津技法は、軟質の緑色凝灰岩を用い、石核の小口面から施溝分割することで板状剥片を作出し、表裏面を平坦になるように研磨して板状素材を作るところに特徴がある。施溝分割とは、石核や素材に石鋸で浅い溝をすり切った後、溝に沿って間接的な打撃を加えることで、割れ面が平らになるように素材を割る技術のことである。この技術は縄文時代の玉つくりではほとんど確認されておらず、本格的な稲作文化の伝播に伴って中国や朝鮮半島から伝わった大陸系磨製石器の製作技術を応用したものと考えられている（下條1987、大賀2002）。西川津技法では板状素材を作る初めの段階で管玉1個体分の幅（径）が定まる。板状素材は表裏面の端から施溝分割を連続的に行い、棒状の管玉素材を作ることで、同一規格品的大量生産を可能にした。同技法は山陰西部の西川津遺跡、布田遺跡などで前期後葉から中期にかけて主体的に行われ、中期前葉には京都府扇谷遺跡、福井県瓶谷在田遺跡、愛知県朝日遺跡まで拡散した。また、山陰西部では島根県平所遺跡のように後期後葉まで同技法が継続した。穿孔具は主に瑪瑙製打製石針、後期は鉄針と想定される。製品は山陰系に分類され、前期～中期は北部九州を中心として中四国地方に散在するように流通する（大賀2011、図4左・中）。

中期中葉になると、玉作遺跡が急増して日本海沿岸の山陰から北陸東部、近畿、東海の各地

に瞬く間に拡散し、山陰以東では大中の湖技法と新徳技法による管玉生産が始まる。

まず、大中の湖技法は兵庫県玉谷産、石川県菩提・那谷産、女代南B群の碧玉、緑色凝灰岩を多用し、施溝具には紅簾片岩製石鋸、穿孔具には安山岩製磨製石針が伴う（佐藤 1970）。同技法は、原石・石核から自然面や不均質な部分を除去し、施溝分割によって立方体や直方体の素材を作ることを第一の目的とする。立方体等の素材は作業面を転移させながら二等分になるように施溝分割し、最終的に管玉1個体分の素材が獲得できるよう表裏面から施溝分割（ヨコ割り）が繰り返される。管玉の規格は最終の施溝分割で決定し、長さや径が画一的な管玉を大量生産することができた。穿孔は安山岩製磨製石針によって行われ、孔内には穿孔具の回転痕が顕著に残る（富山 1997）。この技法は兵庫県雲井遺跡、福井県下屋敷遺跡、石川県八日市地方遺跡、滋賀県大中湖南遺跡、京都府市田斉当坊遺跡、愛知県朝日遺跡、鳥取県青谷上寺地遺跡など、北陸西部、近畿、東海、山陰東部で広域にわたって実施された。また、同技法の拡大と碧玉の供給を積極的に主導したのは、碧玉原産地や関連遺物の出土量や工程別の内容、遺跡の立地からみて北陸西部の石川県八日市地方遺跡であった蓋然性が高い（小松市教育委員会 2003）。そして同技法の主要範囲の西限は山陰東部で、特に西日本では鳥取県青谷上寺地遺跡の出土量が突出して多い。ここには北陸西部から直接的に碧玉が供給され、ここを拠点に山陰周辺の各遺跡に碧玉を再分配したと考える（米田 2008）。ただ、同技法は中期後葉をもって急速に衰退する。その背景には八日市地方遺跡の玉つくりが衰退したことにより、碧玉の供給が途絶えたことが大きな要因の一つと考えられる。同技法による製品は時期、地域、石材によって法量が異なり、北陸西部系、東日本系、西日本系に大別される（大賀 2011）。北陸西部系は北陸、東海、北部九州に散在、東日本系は近畿、北陸、中部、関東、東北、北海道まで広く流通、西日本系は北部九州に集中、山陰、近畿に散在する（図4中）。

一方、新徳技法は新潟県佐渡の猿八産碧玉、鉄石英を多用し、流紋岩製石鋸、石針を工具とする（計良ほか 1961）。同技法は中期後半から後期にかけて新潟県佐渡玉作遺跡群（平田遺跡、下畑玉作遺跡、新徳玉作遺跡ほか）を中心として実施され、本土の下谷地遺跡、吹上遺跡などにも伝播する。石材や技術の分布範囲は北陸東部にとどまり、限定的である。製品は北陸東部系に分類され、中期中葉～後葉は北陸、中部、関東、東北、北海道まで広く流通するが、後期は中部、関東に偏在する（大賀 2011、図4中・右）。

後期になると、玉生産システムが再編され、それまで玉つくりを伝統的に行っていた北陸と山陰に玉作遺跡が偏在する。また当該期には鉄器が急速に普及したこともあり、中期まで石製工具では加工が困難であった花仙山産碧玉などの硬質石材の加工が可能となった。鉄器は玉つくり積極的に投下され、加賀技法（寺村 1980）や布勢技法（清水 1982）と称する新たな管玉製作技術を生んだ。布勢技法や加賀技法は施溝分割を行わずに、鉄製工具により原石や石核を打撃分割して適当な大きさの素材剥片を作成する。そして、素材剥片の側面にしばしば押圧剥離を施して管玉素材を成形した後に研磨で整形し、鉄針で穿孔する。鉄針による穿孔は研磨材の併用が不可欠であるため、貫通後の孔内の表面は回転痕が残らずに平滑となる（富山 1997）。佐渡を除く北陸では緑色凝灰岩を多用するが、山陰では緑色凝灰岩に加え、花仙山産碧玉も用いている。鳥根県花仙山産碧玉の使用は後期前葉まで遡る可能性もあるが、鳥取県久蔵峰北遺跡の

ように後期中葉から本格的に使用された。後期後葉から後期末は鳥取県中～西部や島根県東部、岡山県北東部など山陰及び中国山地山間部に流通するほか、後期末から古墳時代初頭にかけては北部九州へ同碧玉を使用した管玉生産が拡散していく。製品は山陰系、北陸西部系に大別できる。山陰系は軟質の緑色凝灰岩と花仙山産碧玉を用い、北部九州、中部瀬戸内、山陰、近畿北部に著しく分布する一方、北陸西部系は硬質の緑色凝灰岩を用い、山陰系の分布範囲に加え、北陸、東海まで広く流通した。

(2) 勾玉

弥生時代のヒスイ製品は勾玉に特化する。また、列島各地で出土した弥生時代のヒスイは新潟県糸魚川産に限定されることが産地分析によって推定されている(薬科1990)。

弥生時代のヒスイ製勾玉は、定形、亜定形、縮縮形、櫛形、半球型、環状があり、勾玉の類型ごとに主要時期や分布地域に特徴がある(木下1987、河村2010)。このうち、生産地が判明しているのは半球型勾玉で、中期中葉～後葉に福井県下屋敷遺跡(写真1)、石川県八日市地方遺跡、吉崎次場遺跡、富山県石塚遺跡、新潟県箕輪遺跡、下谷地遺跡、吹上遺跡、竹の花遺跡、桂林遺跡で本格的に生産され始め、後期には福井県林・藤島遺跡、富山県下老子笹川遺跡でも生産された(浅野2003、高橋2010)。今のところ生産地は北陸を中心とし、中期は大中の湖技法や新穂技法による管玉生産に伴う。半球型勾玉の製作は、原石→荒割→形割→研磨→挟り入れ→穿孔→仕上げ→完成という工程をたどる(高橋2010、図6)。特に荒割→形割工程で施溝分割によって素材を作出している点は、同地域で盛行した大中の湖技法や新穂技法の管玉製作技術と技術的な共通性が認められる。このほか、定形や櫛形勾玉は今のところ生産地が明確でないが、製品の偏的な分布や形態の特徴から、北部九州で生産された可能性が指摘されている(河村2010)。

また、北陸以外にヒスイ製品の生産を示す資料として、ヒスイの素材や剥片が中期に鳥取県南原千軒遺跡(写真2)や京都府奈具岡遺跡、後期末から古墳時代初頭に島根県堀部第2遺跡から出土しているほか、弥生時代のもので推測されるヒスイ製勾玉の研磨工程未成品が岡山県窪木宮後遺跡、ヒスイ製勾玉の再加工品又は研磨工程未成品が岡山県百間川原尾島遺跡、勾玉・丸玉の再加工品が京都府奈具岡遺跡から出土している(図7)。これらは断片的な資料ながら、ヒスイ原産地とヒスイ製勾玉の主要生産地である北陸と同勾玉の主な消費地と未知の生産地が期待される北部九州とを結ぶ中間地域からの出土例として評価される。

このほか、弥生時代の勾玉はヒスイを基本とするが、時期や地域によってはヒスイ以外に天河石、ガラス、滑石・蛇紋岩等の非貴石、粘土で作られることもある。このうち、滑石・蛇紋岩製勾玉は東北南部、北陸西部、東四国、北部九州などで局地的に生産された(廣瀬2009)。勾玉の増加と材質転換は時期が下るにつれて次第に顕著となり、特に後期以降に加速する。その背景には勾玉を用いた祭祀が墓や集落のあらゆる空間や場面、階層において波及したと考えられる。

(3) 水晶製玉類

水晶製玉類の生産地は西日本の日本海沿岸部に偏在する(図8)。その生産は鉄器の普及と深く関係し、弥生時代中期後葉に京都府奈良岡遺跡(写真3)、中期末から後期初頭にかけて鳥取県西高江遺跡において突如として始まった。そして後期中葉は鳥取県久蔵峰北遺跡で切子玉、後期後葉は島根県平所遺跡で算盤玉、富山県江上A遺跡で不定形小玉が生産された。さらに、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけては、北部九州の福岡県城野遺跡、潤地頭給遺跡でも算盤玉の生産が一時的に行われた。

水晶は硬度7の結晶体であり、鉄器を使用しなければ加工は容易ではない。弥生時代における水晶製算盤玉の製作技術は、奈良岡技法と平所技法に大別される(河野・野島2001)。まず、奈良岡技法は舶載の鑄造鉄斧や鑄鉄脱炭鋼を再加工した鉄器を利用して水晶の原材を分割し、素材に調整剝離を施して四角柱体に成形する。そして全面を研磨してから目的とする玉の大きさに切斷し、再び研磨や敲打で整形する。穿孔具は珪化木製石針を主に用いたが、のちに鉄針も使用した。仕上がった玉は、主に径3mm前後の算盤玉である。この技法は奈良岡遺跡と西高江遺跡で共通する。一方、平所技法は水晶の結晶体を原石とすることが多く、その上下端面を鉄製工具で切斷し、必要に応じて結晶体の中央部分を縦分割して素材を作出し、側面の敲打整形をへて、鉄針で片面から孔を穿つ。この技法は平所遺跡、城野遺跡、潤地頭給遺跡に共通する。ただし、各遺跡で作られた算盤玉は法量や形態の遺跡差が著しい。

弥生時代に流通した水晶製玉類には算盤玉と切子玉がある。ただ、各遺跡では玉の大きさや長さや径のバランス、穿孔方法などの属性が千差万別で、遺跡間の個体差が大きい。図8をもとに消費地をみると、中期は北部九州と中部瀬戸内に点在する。後期は北部九州と中部瀬戸内に加え、山陰東部から近畿北部、中部と関東の一部に偏在する傾向が強い。

(4) ガラス製品

弥生時代にガラス製品の素材となったガラスの材質とその生産地をまとめると、鉛ガラスと鉛バリウムガラスは中国産、紺色のコバルトによる着色のカリガラス及び高アルミナソーダ石灰ガラスはインドから東南アジア、淡青色の銅着色のカリガラスは中国南部やベトナム中部とされ、日本列島には各地から様々な経路をへて舶載された(肥塚ほか2010)。

弥生時代におけるガラスの出現は弥生時代前期末に遡り、北部九州に流通が限定される。中期後半になると、福岡県須玖五反田遺跡をはじめとした北部九州周辺で鉛ガラスバリウムを素材とした鋳型法による勾玉生産が始まり、製品も北部九州周辺にほぼ集中する。近畿においても、中期後半には京都府奈良岡遺跡でカリガラスや鉛バリウムガラスを素材とした小玉、大阪府東奈良遺跡では勾玉が製作される。近畿周辺ではカリガラスを主体とした製品が集中し、後期にかけて東海や瀬戸内東部にも広がる。このように北部九州と近畿ではガラス素材が限定的で、目的とする製品や製作技法とともに地域性が形成される(大賀2010)。後期後半になると、ガラス製品の数が大幅に増し、列島各地へ拡散するが、なかでも北部九州、近畿に濃密に分布するほか、山陰の墳丘墓にも多く副葬される(小寺2006、写真4・5)。

4 玉つくりから見た地域間交流

玉つくりは材料を入手し、様々な工具を駆使し、特殊な技術をもって実施される。すなわち、玉作技術は特殊であるがゆえ、材料が流通する時には工人の移動が不可欠となる。弥生時代の玉つくりは、材料の供給と玉作技術の伝播、工具の材質転換によって地域性が形成され、発展段階ごとに変化する(図9)。

弥生時代前期、初現的な管玉製作技術である長瀬高浜技法は山陰東部や中部瀬戸内で単発的に見られた。また山陰西部では西川津技法が成立し、中期前葉にかけて北陸西部まで伝播した。

中期中葉～後葉になると、西川津技法による管玉生産は山陰西部の狭小な範囲にとどまり、中期前葉以前に比べて交流が停滞する。また、新穂技法による管玉生産は新潟県佐渡を中心とした北陸東部のみで後期まで局地的に行われた。一方、大中の湖技法による管玉生産は主に北陸西部を起点とし、近畿、東海、山陰の広大な範囲に瞬く間に広がり、当該期に相互の地域間交流が活発化した。このとき、碧玉の搬出と玉つくり技術の指導に伴う工人の派遣にあたっては、八日市地方遺跡が主導的役割を担った。さらに、大中の湖技法による管玉生産の西限は日本海沿岸の山陰東部にあたり、玉作関連遺物の出土量や内容から同地域の中核をなしたのは青谷上寺地遺跡にほかならない(鳥取県埋蔵文化財センター2013a)。地理的条件や同技法の管玉生産を行った遺跡の分布を見ると、山陰と北陸西部との交流の舞台が日本海であったことは容易に想像できる。青谷上寺地遺跡からは船形・櫛形木製品が数多く出土しており、海上交通に船が使用されたことは明白である(鳥取県埋蔵文化財センター2012)。また弥生土器に描かれた船の絵画からも交流の一場面を知ることができる(図10右)。こうした資料から、弥生時代の船は丸木船に舷側板等の部材を緊縛して安定性を高めた準構造船が多かったことも窺える。ただ、準構造船は原動力を持たないため、航行には風や海流の影響を受けやすい。日本海の海流の方向や速さは季節や時間によって複雑に変化するが、北陸以西では常に山陰沖を境にその東西で海流の様相が大きく異なっている(図10左)。その要因として島根半島から隠岐諸島にかけて大陸棚が浅くて海底地形が高いことがあげられ、結果的に周辺の高流の方向や速さに多大な変化をもたらしている(図10中)。こうした海流は弥生時代の航行に多大な影響を与えたことは言うまでもない。北陸西部を起点として西へ航行した場合、年間を通じて隠岐諸島の東側で海流が南流することが多く、山陰東部を目的地とするほかなかった。このことは碧玉だけでなく、ヒスイ素材の流通においても同様である。

後期になると、女代南B群碧玉の流通システムが解体し、大中の湖技法による管玉生産は急速に衰退した。山陰と北陸西部では新たな石材を開発するとともに、普及し始めた鉄器を駆使して加賀技法・布勢技法による管玉生産に切り替わった。鉄器を駆使した製作技法は共通するものの、石材は両地域間を流通することなく、次第に各地域で独自性が生まれる。さらに山陰では後期中葉から花仙山産碧玉が本格的に使用され始めるが、山陰以東に流通することはなかった。逆に弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけては山陰から北部九州へ花仙山産碧玉を携えて工人が赴き、同碧玉を用いた管玉及び平所技法による水晶製玉類を一時的に生産した。

以上のように、玉つくりは材料の流通、製作技術の伝播、生産地から消費地までの製品の流通などを復元することにより、弥生時代の地域間交流の一端を知ることができる。

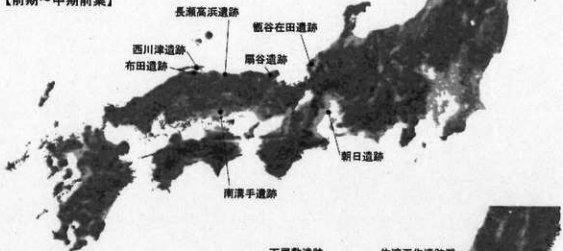
(参考文献)

- 浅野良治 2003「日本海沿岸における翡翠製勾玉の生産と流通」『富山大学考古学研究室論集歴史気候』秋山進午先生古稀記念論文刊行会
- 大賀克彦 2001「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』第86巻第4号 日本考古学会
- 大賀克彦 2002「日本列島における管玉生産の成立」『甌谷』清水町教育委員会
- 大賀克彦 2010「日本列島におけるガラスおよびガラス玉生産の成立と展開」『月刊文化財』No.566 文化庁文化財部
- 大賀克彦 2011「弥生時代における玉類の生産と流通」『講座日本の考古学5 弥生時代 上』同成社
- 河野一隆・野島永 2001「玉と鉄—弥生時代玉作り技術と交易—」『古代文化』第53巻4号 財団法人 古代学協会
- 河村好光 2010『倭の玉器 玉つくりと倭国の時代』青木書店
- 木下尚子 1987「弥生定形勾玉考」『東アジアの考古と歴史』岡崎敬先生退官記念論文集(中) 同朋社
- 計良由松・権名仙卓 1961「後期弥生文化の攻玉法—佐波新徳玉作遺跡の資料を中心として—」『考古学雑誌』第47巻第1号 日本考古学会
- 肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010「材質とその歴史的変遷」『月刊文化財』No.566 文化庁文化財部
- 小松市教育委員会 2003『八日市地方遺跡』1
- 小寺智津子 2006「弥生時代のガラス製品の分類とその副葬に見る意味」『古文化談叢』第55集 九州古文化研究会
- 佐藤宗男 1970「大中の湖南遺跡における玉作について」『古代文化』第22巻第1号 (財)古代学協会
- 島根県立古代出雲歴史博物館 2009『輝く出雲ブランド 古代出雲の玉作り』
- 清水真一 1982「鳥取県下の玉作遺跡について」『考古学研究』通巻112号 考古学研究会
- 下條信行 1987「東アジアにおける擦切技法について」『東アジアの考古と歴史』上 岡崎敬先生退官記念論文集 同朋舎
- 高橋浩二 2010「翡翠半球形勾玉の製作技術と地域性の背景」『待兼山考古学論集II—大阪大学考古学研究室20周年記念論集—』大阪大学考古学研究室
- 寺村光晴 1966『古代玉作の研究』吉川弘文館
- 寺村光晴 1980『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館
- 寺村光晴 1990「タマの道—タマからみた弥生時代の日本海」『日本海と北国文化 海と列島文化』第1巻 小学館
- 寺村光晴編 2004『日本玉作大観』吉川弘文館
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2012『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告8 木製農具・漁撈具』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告47
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2013a『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告9 玉・玉作関連資料』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告52
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2013b『日本海を行き交う弥生の宝石—青谷上寺地遺跡の交流をさぐる』
- 富山正明 1997「林・藤島遺跡(泉地区)出土の鉄製品」『東日本における鉄器文化の受容と展開』第4回鉄器文化研究会発表要旨 鉄器文化研究会
- 廣瀬時習 2009「玉生産と流通」『弥生時代の考古学 6 弥生時代のハードウェア』同成社
- 米田克彦 2000「碧玉製管玉の分類と碧玉原産地」『古代吉備』第22集 古代吉備研究会
- 米田克彦 2008「山陰地方における弥生時代玉生産の変遷と地域的特徴」『山陰における弥生時代の鉄器と玉』第36回山陰考古学研究会集事事務局
- 米田克彦 2009「装身具の色と輝き」『むきばんだんの人々が愛した色—弥生時代の色彩世界—』第9回 弥生文化シンポジウム 鳥取県教育委員会
- 李弘鐘・朴淳發・朴天秀・朴升圭・李在煥・金大煥・藁科哲男・中村大介 2008「朝鮮半島における玉類の理化学的分析と流通」『湖西地域色落社会の変遷』湖西考古学会
- 藁科哲男 1990「ヒスイを科学する—その後の成果—」『古代翡翠道の謎』新人物往來社
- 藁科哲男 1994「玉類の原産地分析から考察する玉類の分布圏の研究」『平成5年度科学研究費補助金(一般研究C) 研究成果報告書』

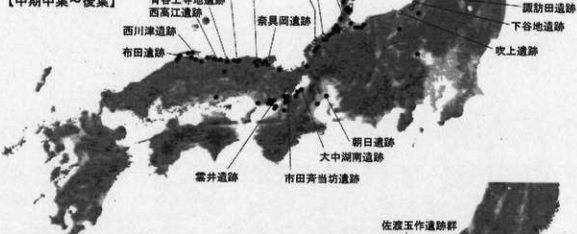
(挿図・写真出典)

図1・3・5・8・9・10、写真1～5は鳥取県埋蔵文化財センター2013b、図2は島根県立古代出雲歴史博物館2009、図4は大賀2011、図6は高橋2010、図7は各発掘調査報告書から転載。

【前期～中期前葉】



【中期中葉～後葉】



【後期】



- : 菅玉
- : 菅玉 + ヒスイ製勾玉
- △ : 菅玉 + 水晶製玉類
- : 菅玉 + ヒスイ製勾玉 + 水晶製玉類

図1 弥生時代における主な玉作遺跡の分布

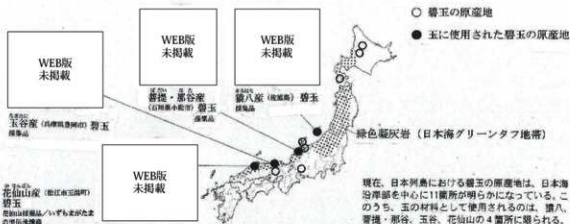


図2 碧玉・綠色凝灰岩の原産地





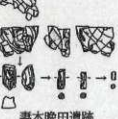
色	色					
	ごくうすい緑 (2.5G8.5/2.5)	くすんだ緑 (4G5/4)	こい緑 (5G3/7)	くすんだ青緑 (10G5.5/5)		
硬さ	軟 (硬度2-3)		硬 (硬度7)			
紋度	粗		緻密			
石材 (原産地・産物群)	綠色凝灰岩		碧玉(女代南B群) 碧玉(岩手・那谷産) 碧玉(玉谷産)	碧玉(標本山)	碧玉(花山山産)	碧玉(未定C群)
生産時期・地域	前期	山陰 瀬戸内(中部)				(朝鮮半島)
	中期	山陰	山陰(東部) 瀬戸内(中・東部) 近畿(北部・南部) 北陸(西部)	佐渡 北陸(東部)		
	後期	山陰 北陸		佐渡	山陰 北部九州	(朝鮮半島)
碧玉製作技術	前期	長瀬高浜技法(A技法) 西川津技法(A技法)				
	中期	西川津技法(A技法)	大甲の巖技法(B技法)	新徳技法(B技法)		
	後期	西川津技法(A技法) 加賀技法(C技法) 宍野技法(C技法)		新徳技法(B技法)	加賀技法(C技法)	

※碧玉製作技術の名称は、計良・権名1961、佐藤1970、寺村1980・1990、清水1982、()内は大賀2001による。

図3 弥生時代の碧玉生産と石材・色の関係



図4 弥生時代における碧玉の流通関係

製作技術	石材	素材 出術 作技	穿孔具	時期	製作工程	管玉未成品 (写真2)	代表遺跡
長瀬高浜技法 (X技法)	綠色凝灰岩	打擊分割 ↓ 管玉素材	打製 石針 (磨頭部)	前期		WEB版未掲載 長瀬高浜遺跡	長瀬高浜遺跡 南溝手遺跡
西川津技法 (A技法)	綠色凝灰岩	施溝 ↓ 板状素材 ↓ 管玉素材	打製 石針 (磨頭部) ↓ (鉄針)	前期 後期		WEB版未掲載 西川津遺跡	西川津遺跡 津田遺跡 谷田遺跡 飯朝石矢野所遺跡
大中の湖技法 (B技法)	碧玉 (女代宮日部、 新羅、那谷岳、 玉谷遺)	施溝 ↓ 立方体素材 ↓ (ヨコ割り) 管玉素材	磨製 石針 (或山磨製)	中期 後期		WEB版未掲載 下屋敷遺跡	下屋敷遺跡 八日市地方遺跡 奈具岡遺跡 女代神社南遺跡 青谷上寺地遺跡 市田斎当坊遺跡 大中南遺跡 朝日遺跡
新穂技法 (B技法)	碧玉 (旗八郎) 鉄石英	施溝 ↓ 立方体 素材 ↓ (タテ割り) 管玉素材	磨製 石針 (或山磨製)	中期 後期		WEB版未掲載 佐渡玉作遺跡群 (下畑)	佐渡玉作遺跡群 下谷地遺跡 吹上遺跡
布勢技法・加賀技法 (C技法)	綠色凝灰岩	打擊分割 ↓ 管玉素材	鉄針	後期		WEB版未掲載 林・藤島遺跡	下老子笹川遺跡 塚崎遺跡 二子塚遺跡 林・藤島遺跡 笠見第3遺跡 布勢第2遺跡 長砂第3遺跡
	碧玉 (花山山麓)	打擊分割 ↓ 管玉素材	鉄針	後期		WEB版未掲載 妻木晩田遺跡	笠見第3遺跡 久蔵峰北遺跡 妻木晩田遺跡 平所遺跡 山持遺跡 堀部第2・3遺跡 城野遺跡 調地頭給遺跡

※管玉製作技術の名称は、計良・椎名1961、佐藤1970、寺村1980・1990、清水1982、()内は大賀2001による。

図5 弥生時代管玉の製作技術の特徴

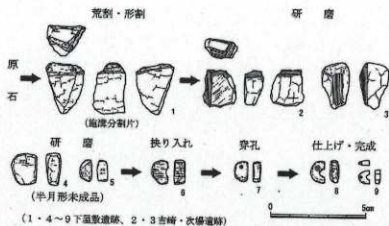


図6 ヒスイ製半球型勾玉の製作技術 (S=1/2)

WEB版未掲載

写真1 ヒスイ製勾玉の完成品・未成品 (黒川県下笠原遺跡)

WEB版未掲載

写真2 黒漆のあるヒスイ素材 (鳥取県成原千軒遺跡)



1鳥取県南原千軒遺跡、2~4・7~9京都府奈具岡遺跡、5岡山県榎木宮後遺跡、6岡山県百間川原尾島遺跡

図7 西日本におけるヒスイ製玉類の未成品・再加工作品 (S=1/2)

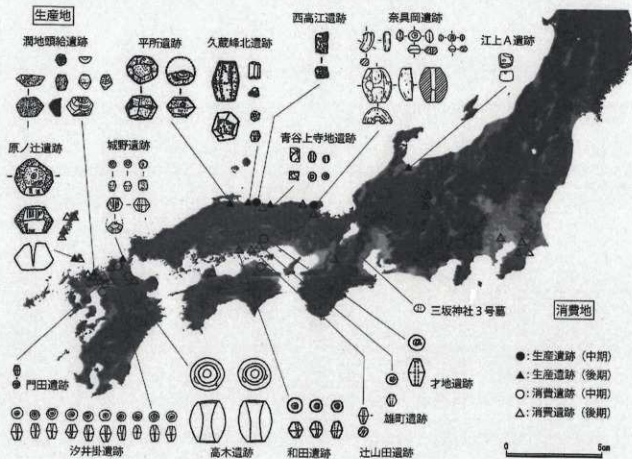


図8 弥生時代の水晶製玉類の主な生産地と消費地 (S=1/2)



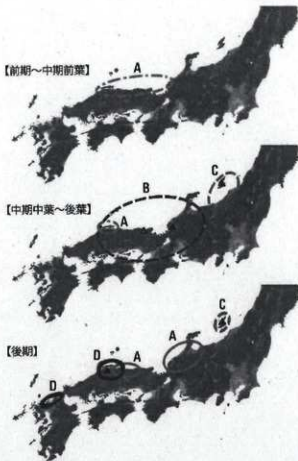
写真3 水晶製玉類の未成品と石・鉄製の穿孔具
(京都府余呉町道跡)



写真4 ガラス製玉類出土状況
(鳥取県松原1号墳横溝)



写真5 ガラス製管玉
(鳥取県門上谷1号墓)

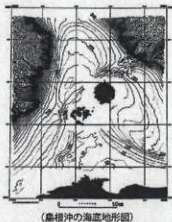


- A— 棕色凝灰岩
 - B— 碧玉 (女代南B群、▲: 石川県善達・那谷産、▲: 兵庫県玉谷産)
 - C— 碧玉 (▲: 新潟県猿八産)
 - D— 碧玉 (▲: 鳥根県花仙山産)
- ※ 網線: 西川津技法、点線: 大中の淵・新澤技法、実線: 加賀・布勢技法

図9 弥生時代における管玉生産の地域性



(日本海の流れ: 2012年2月上旬平均)



(島根沖の海底地形図)

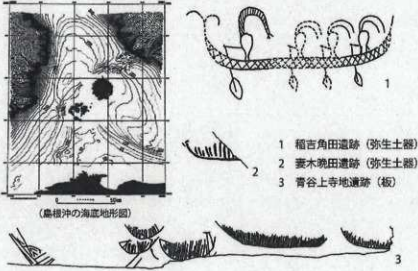


図10 日本海の流れと弥生時代に描かれた船

青谷上寺地遺跡の玉づくり

鳥取県埋蔵文化財センター
河合 章行

1. 遺跡の概要

青谷上寺地遺跡は、鳥取市青谷町青谷に所在する弥生時代前期後葉から古墳時代前期を中心
に営まれた集落遺跡である。現在、遺跡は勝部川と日置川が形成した青谷平野のほぼ中央に位
置するが、当時は青谷平野の北東部が潟湖になっており、そこに勝部川と日置川が流れ込んで
いた(図1・2)。当時の集落(遺跡の中心城)は、南西側から北流する勝部川が形成した三
角州の先端部に立地している。

集落は弥生時代前期後葉～中期前葉に形成されはじめ、弥生時代中期中葉～後葉には盛期を
迎える。多くの鉄製品がもたらされ、木製容器や玉、骨角器などの「ものづくり」が活発にお
こなわれるとともに、遺跡中心城の西側と東側には区画溝に護岸が構築された。その後、寒冷
化の影響等により弥生時代後期前半はやや停滞するものの、弥生時代後期～終末期に集落は最
盛期を迎える。遺跡中心城も拡張され、その東・南・西側縁辺部には大規模な「土木工事」によ
って構築された区画溝が整備された。このとき、「ものづくり」も最盛期を迎え、この時期に製

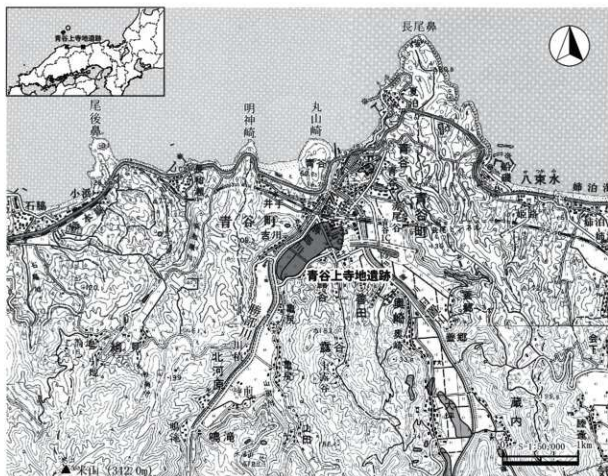


図1 青谷上寺地遺跡の位置



図2 青谷上寺地遺跡の環境（約1,800年前）

作された秀麗な木製品の代表である「花卉高杯」は、北陸から北部九州にまで分布している。このように、「ものづくり」と「土木工事」は、青谷上寺地遺跡を読み解く上で重要な鍵である。

また、青谷上寺地遺跡は「交易拠点としての港湾集落」という側面も合わせ持っている。先述した潟湖は天然の良港となり、他地域との交流が盛んに行われた。今回は、玉研究の視点から、青谷上寺地遺跡の「ものづくり」と「交易拠点としての港湾集落」という特徴に焦点を当てて報告したい。

なお、青谷上寺地遺跡の時期区分については、弥生時代前期後葉から中期前葉を「Ⅰ期」、弥生時代中期中葉から後葉を「Ⅱ期」、弥生時代後期から古墳時代前期初頭を「Ⅲ期」、古墳時代以降を「Ⅳ期」とする。

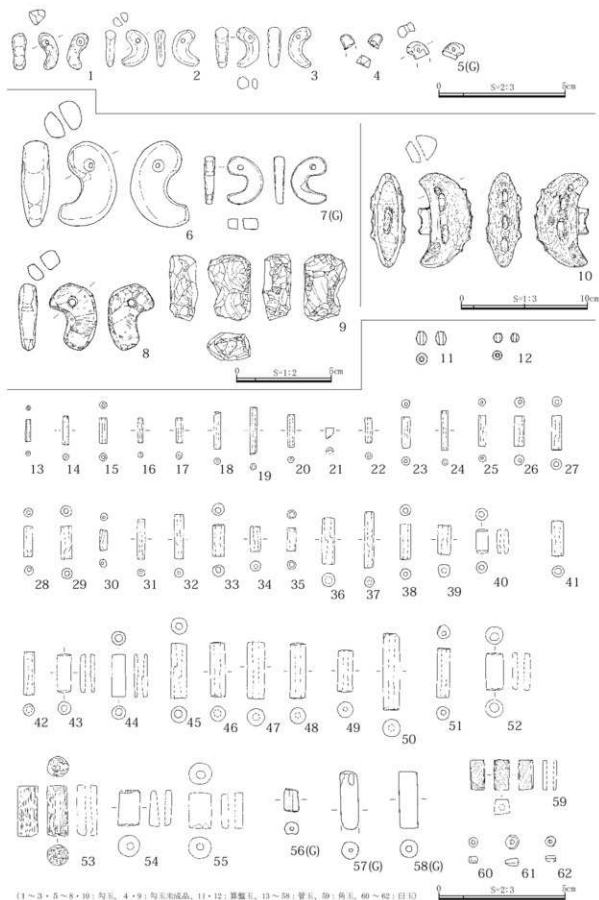
2. 遺跡から出土した玉の種類

青谷上寺地遺跡では、勾玉、管玉、角玉、算盤玉、小玉、白玉の6種類が認められる。

勾玉は9点出土している。素材は、ヒスイのほか、蛇紋岩、滑石、ガラスが認められる。ヒスイ製の勾玉では、弥生時代の北陸でよく見られる「半球型勾玉」や北部九州でよく見られる「垂定形勾玉」などが認められる。また、Ⅳ期の遺物包含層からは、「子持ち勾玉」や模造品などの滑石製品が出土している。

管玉は56点出土している。素材は、碧玉、緑色凝灰岩、ガラスが認められる。石製の玉では最も数が多い。長さ4～30.8mm、径2.2～8.9mmと個体差が大きく、形状もバリエーションに富んでいる。これは、遺跡内で製作したものと他の遺跡から搬入されたものの両者が混在していることが要因と考えられる。

角玉は1点出土している。素材は碧玉製で、北陸地方との関わりが窺える資料である。



11・12: 算盤玉, 13～58: 管玉, 59: 角玉, 60～62: 白子

図3 青谷上寺地遺跡出土の玉

算盤玉は1点出土している。素材は水晶製で、中央に甘い稜を持つ。

小玉は約200点出土している。素材はガラスや水晶が認められるが、特に弥生時代後期以降はガラス製小玉が急増して主体をなす。

白玉は3点出土している。素材は滑石製で、Ⅳ期の遺物包含層から出土している。

3. 玉つくりの特徴

(1) 玉の素材

青谷上寺地遺跡から見つかった玉の素材は、ヒスイ、碧玉、緑色凝灰岩、水晶、蛇紋岩、滑石、ガラスなどである。

これらのうち、ヒスイと碧玉は産地分析を行った。ヒスイはいずれも糸魚川産と判定され、碧玉は、菩提、菩提・女代南B遺物群、女代南B遺物群、青谷上寺地遺跡A遺物群、青谷上寺地遺跡B遺物群、玉谷、花仙山、未定C遺物群などの原石・遺物群が判定結果として示された(薬科2012、図4)。

菩提、女代南B遺物群、青谷上寺地遺跡B遺物群は接合関係が認められ(接合資料1)、これらの原石・遺物群は、同じ原産地に由来するものとして差し支えないと考えられる。また、菩提・女代南B遺物群についても、菩提や女代南B遺物群と近似するものとして考えると、菩提、菩提・女代南B遺物群、女代南B遺物群、青谷上寺地B遺物群は、石川県小松市菩提周辺で採取できる碧玉として捉えることができる。ここでは、これらの原石・遺物群を総称して、「菩提系碧玉」と呼ぶこととする。原産地分析を実施した碧玉116点のうち、約65%が菩提系碧玉であった。青谷上寺地遺跡の中で最も出現頻度が高く、玉作の主体を占める石材である。

青谷上寺地遺跡A遺物群という判定結果が得られた資料は、良質の緑色凝灰岩と考えられ、比較的出土点数も多い。未定C遺物群や玉谷の碧玉は、今のところ完成品しか認められないため、他の遺跡から製品としてもたらされたものと判断できる。花仙山の碧玉は濃緑色を呈し、肉眼でも比較的認識しやすい石材である。青谷上寺地遺跡からは数点しか出土しておらず、いずれも施溝分割技法を用いずに間接打撃等で剥離・分割を行っている。全体の1%程度を占めるに過ぎず、青谷上寺地遺跡における玉作素材としては極めて限定的である。

(2) 管玉の製作技術

菩提系碧玉および緑色凝灰岩(青谷上寺地遺跡A遺物群)には、施溝分割技法による分割面が多く認められ、これらの石材と施溝分割技法とは強い関連性が認められる。また、これらの原石・遺物群を合わせると、青谷上寺地遺跡の玉作資料の8割程度を占め、玉作の中核を占め

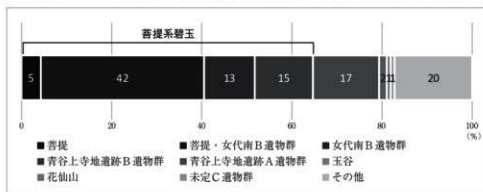


図4 碧玉の産地分析結果

ている。青谷上寺地遺跡では、11個体の接合資料を確認することができた。そのうち6点に、施溝を伴う剥離・分割が認められる(図5)。ここでは、接合資料から分かる管玉の製作技術について詳細に見ていくことにする。

ア) 接合資料からみた四角柱状材の獲得法

剥離・分割段階の手順

剥離・分割段階の手順が最もよく分かるのは、接合資料1(図5-1~8)である。接合資料1は、拳大よりやや大きめの亜角礫を素材に用い、はじめから施溝分割技法を用いて分割を進めている。ある程度、分割が進んだ後、今度は施溝分割技法を用いず、両極打法による分割を行い、その後は施溝分割を繰り返している。つまり、打割→施溝分割という流れではなく、この資料からは施溝分割→打割(両極打法)→施溝分割という流れを読み取ることができる。

この作業手順の背景には、素材の形状や質が大きく影響していたと考えられる。つまり、最初に施溝分割を行ったのは、素材となる亜角礫の平坦面が施溝分割を行いやすい条件を整えたためと考えられ、また、途中で両極打法による打割を行ったのは、厚い礫表皮層を打点とする必要が生じて施溝分割技法ではうまく分割できないと判断したためと考えられる。

このように、施溝分割と打割を交互に繰り返すという事例は、接合資料2でも認められる。この資料では、施溝分割で失敗した分割面を打割(直接打法)によって平坦に成形し、その後、施溝分割を進めている。

以上から、原石からの剥離・分割段階では、素材の形状や直前の剥離・分割の成否に対応するため、打割技法と施溝分割技法をその都度選択しながら作業を進めていたことは明らかである。このことから、管玉製作における剥離・分割の段階は、「打割→施溝分割」という単純な作業手順ではないことが分かる。

直方体材の獲得

施溝分割を伴う管玉製作の重要な要素の一つには、四角柱状材を連続的に作出できる「良質なブランク(母型)」を獲得することが挙げられる。青谷上寺地遺跡の場合、この「良質なブランク」が直方体材に該当する。

直方体材は、打割と施溝分割を間雲に繰り返して獲得できるものではない。素材の形状、節理・層理の入り方、礫面・礫表皮層の状態、石材中の斑晶や不純物の入り方などを見極めながら、明確な意図を持って剥離・分割を行う必要がある。そのとき、製作者の意図を最もよく表すのが、施溝痕の位置である。

接合資料1を見ると、6は礫の表皮層を持ち、石材中の斑晶や不純物が多かったため、この部分の除去を意図して施溝分割されている。5も同じ意図によって施溝分割されており、両者は明確に「不要部分の除去」のため、施溝分割されたと言える。直方体材は、このような「不要部分の除去」を重ねた結果、獲得することができる。

接合資料1の場合は、最後に4が除去され、「 $1 \sim 3 + a^{(1)}$ 」となった段階が直方体材である。

四角柱状材の獲得

四角柱状材は、直方体材をさらに施溝分割することによって獲得され、管玉1個分の直径に相当する幅、厚さを持っている。

接合資料1を見ると、直方体材($1 \sim 3 + a$)は、施溝分割で「 $1 + 2 + a$ 」と「3」に分割される。このとき、3は礫の表皮層や斑晶・不純物を含むために遺棄されている。こうして得られた直方体材をさらに施溝分割したものが、四角柱状材($1 \cdot 2 \cdot a$)である。いずれも

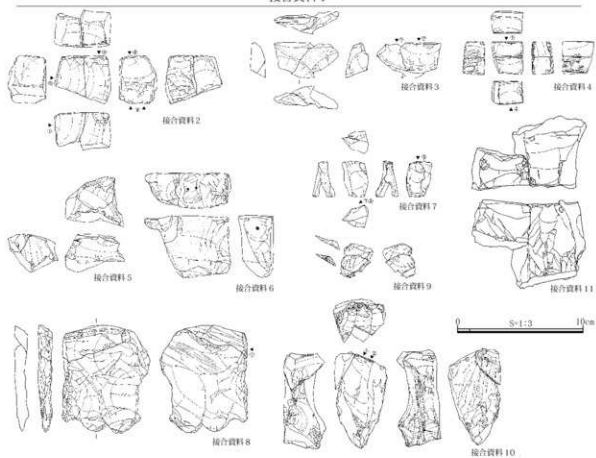
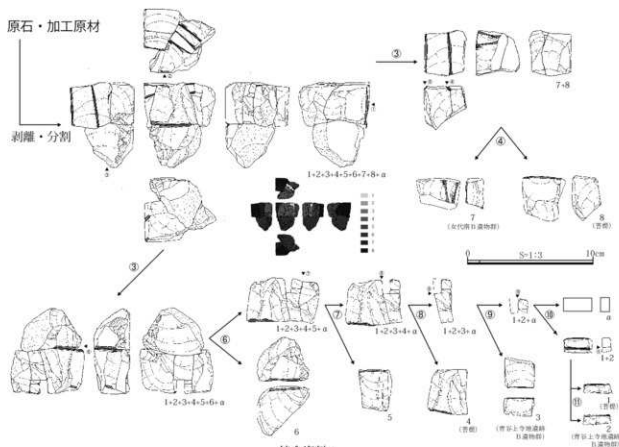


図5 青谷上寺地遺跡の碧玉製作接合資料

幅・厚さが異なるため、目的とする管玉の径は明らかではないが、青谷上寺地遺跡で出土した菩提系碧玉の完成品は、径2.2mmから径6.9mmまでと個体差が大きく、一個体の原石から様々な大きさの四角柱材が獲得された可能性も考慮する必要がある。ただし、2は、1の大きさを整えるために分割された除去片（不要部分として取り除かれた分割片）の可能性もある。

(イ) 技術的特徴

これまで見てきたとおり、青谷上寺地遺跡の管玉製作は非常に柔軟性が高く、目的に合わせて、打割（直接打撃・間接打撃）、施溝分割の各技法を臨機応変に使用していることが分かる。さらに細かく見てみると、非常に複雑な要素を含んでいることが明らかになってきた。

剥離・分割段階の研削・研磨

剥離・分割の過程において、打割や施溝分割以外に研削や研磨を行う事例が認められる。先に、打割によって分割面の調整を行う事例を紹介したが、これと同様に分割面の凹凸を取り除くことが目的であれば、荒砥石による研削だけで良いはずである。

図5の接合資料4は、良質の直方体材である。直前までの施溝分割に何ら問題はなく、きれいな直方体を呈している。しかし、複数の面に細かな擦痕が認められ、研削が施されていることが分かる。

このように、実際には粗い擦痕はほとんど認められず、非常に細かい擦痕であったり、研磨されたように擦痕がほとんど認められない資料も存在している。また、明らかに除去片に分類できる資料の一部に、研削・研磨の痕跡が認められる場合もある（図6-1~5）。

以上から、これらの研削・研磨は、剥離・分割に直接的に関係する作業ではなく、石材の質を見極めるために行ったと考えられる。

剥離・分割段階の穿孔

同じく、剥離・分割の過程において、深さ1mm未満の穿孔が行われる資料が認められる。このような痕跡は、多角柱状材の端面にも認められることがある。多角柱状材に残された痕跡は、穿孔の準備段階のものとして捉えることができようが、剥離・分割過程の浅い穿孔痕も、同じように考えることができるのだろうか。

図6-6に提示した直方体材には、複数の浅い穿孔痕が認められる。これらの穿孔痕は、無作為に施され規則性がない。この後、施溝分割が進んで四角柱状材を作出したとしても、その端面の中心部分に位置するとは考えにくい。

以上から、これらの穿孔は、先の研削・研磨痕と同様に、石材の質を見極めるために行ったと考えられる。

施溝分割の方法

接合資料1の6をはじめ、大型の除去片を見てみると、分割面の施溝痕側に明瞭なリングが認められたり、施溝痕の対面から僅かにリングが生じる事例が認められることから、施溝後に両極打法で分割するという方法が一定の割合を占めていたと想定される。

一方、接合資料1の1~3のような直方体材や四角柱状材の施溝痕には、直接打撃の痕跡は認められない。このように、分割が進んだ段階では、施溝痕内に微細な剥離が複数認められる場合があり（図6-7・8）、間接打撃で溝内にヒビを生じさせてから、分割するという方法がとられた可能性もある。

以上のように、施溝分割の方法は、分割の段階や素材の形状によって、使い分けられたと想定される。

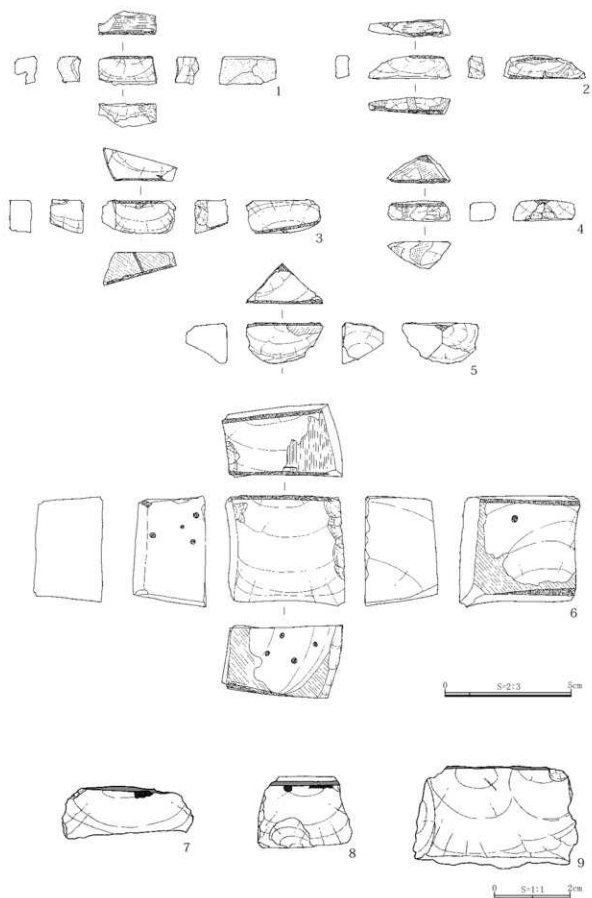


図6 技術の特徴を示す資料

(ウ) 管玉製作の手順

これまで施溝分割技法を伴う管玉製作について細かく見てきたが、ここでは青谷上寺地遺跡における製作の手順についてまとめておく(図7)。

①原石等の獲得

原石や加工原材を獲得する。石材は、主に菩提系碧玉を搬入して用いていた。

②剥離・分割

打割や施溝分割等を繰り返す。この段階は、さらに二つの段階に細分できる。

ア) 第1段階

直方体材を作出するまでの段階。

イ) 第2段階

直方体材から四角柱状材を作出するまでの段階。

③研削成形

四角柱状材の研削を行い、多角柱状材を作出する。

④穿孔

多角柱状材の上下端面から穿孔を行う(両面穿孔)。

⑤仕上げ

多角柱状の穿孔品を研削で円柱状に成形し、研磨で表面の光沢を出して仕上げる。

以上、①～⑤が青谷上寺地遺跡の標準的な管玉製作の手順である。

ただし、例外として、剥離・分割段階と研削成形段階の間に、間接打撃等で側面調整を行ったとみられる資料や、直方体材を作出せずに板状材をブランクとして作出して連続的に四角柱状材を作出する資料も数点ずつ認められる。

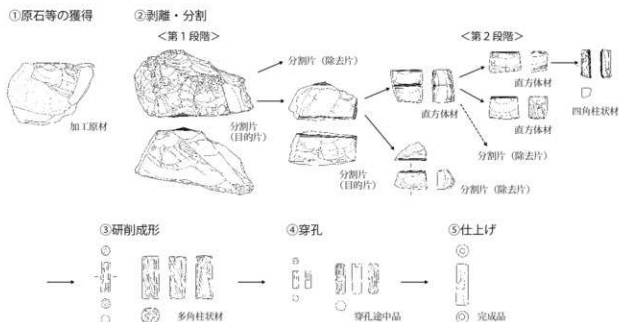


図7 青谷上寺地遺跡の管玉製作手順

4. 青谷上寺地遺跡の交流と玉

これまで、青谷上寺地遺跡出土の玉と管玉製作資料について見てきたが、最後に青谷上寺地遺跡の玉・玉作関連資料の調査研究から見てきた交流の姿を考えてみる。

(1) 各時期の様相 (図8)

① 弥生時代前期～中期前葉

弥生時代前期には、鳥取県の長瀬高浜遺跡において、「①緑色凝灰岩を用いる」、「②直接打法で素材剥片を剥離する」、「③玉髓製の石針で穿孔する」ことが特徴である「長瀬高浜技法」で管玉製作が行われた。一方、鳥根県の西川津遺跡では、弥生時代前期～中期に、「①緑色凝灰岩を用いる」、「②板状の素材を施溝分割技法で作出する」ことが特徴である「西川津技法」で管玉製作が行われる。「西川津技法」は、弥生時代中期前葉になると、北近畿や北陸にも広がりを見せた。

弥生時代中期前葉には、「菩提系碧玉」の原産地に近い、石川県の八日市地方遺跡や福井県の下屋敷遺跡では、「大中の湖技法」による管玉製作が開始される。青谷上寺地遺跡でもこの時期から管玉製作が開始されており、北陸地域から、「菩提系碧玉」という素材と「大中の湖技法」という製作技法の組合せが伝わったと考えられる。

② 弥生時代中期中葉～後葉

弥生時代中期中葉になると、八日市地方遺跡が最盛期を迎え、管玉製作も頂点に達する。この時期は、「大中の湖技法」と「菩提系碧玉」が最も拡散する時期で、鳥取県の青谷上寺地遺跡や東前遺跡をはじめ、京都府の奈良岡遺跡・市田齊当坊遺跡、滋賀県の大中の湖南遺跡など、大規模な玉作遺跡が多数認められる。また、「菩提系碧玉」を用いて管玉製作する遺跡には、和歌山県の紀ノ川流域や徳島県の吉野川流域で採取できる「紅簾片岩」製の施溝具（石鋸）がしばしば伴うことから、玉素材だけではなく工具の素材も含めた石材ネットワークが形成された時期と言える。

ところで、弥生時代中期において、佐賀県の中原遺跡では、281基の甕棺の中に、合わせて650個の管玉が副葬されている。そのうち、465個は「菩提系碧玉」製で、全体の約7割を占めている。石材原産地から遙か600kmも離れた場所で多数の管玉製品が見つかるということは、「菩提系碧玉」のブランド力の高さと、当時の交流がいかに広範囲に行われていたかを示している。

しかし、弥生時代中期後葉になると、八日市地方遺跡が衰退し、「菩提系碧玉製」の流通も徐々に減少していく。この時期には、京都府の奈良岡遺跡や鳥取県の西高江遺跡で水晶製の玉類が製作されるようになり、ガラス製の玉類も流通するようになる。玉の生産と流通は、徐々に多様化していったと考えられる。

③ 弥生時代後期～終末期

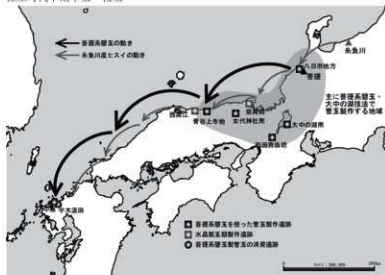
弥生時代後期になると、八日市地方遺跡が終焉を迎え、「菩提系碧玉」の流通が停滞するようになり、各地で代わりの石材を使った管玉製作が開始された。

鳥取県では、布勢第2遺跡や秋里遺跡、笠見第3遺跡などで管玉製作が行われるが、青谷上寺地遺跡では、ほとんど管玉製作が行われなくなった。また、北陸地方でも石川県の林・藤島遺跡や塚崎遺跡、富山県の下老子笹川遺跡などで緑色凝灰岩製の管玉製作が行われるが、いずれの遺跡でも、施溝分割技法を用いずに直接打法や間接打法によって素材となる剥片を獲得する管玉製作技法が一般化する。

弥生時代前期～中期前葉



弥生時代中期中葉～後葉



弥生時代後期～古墳時代前期初頭



図8 時期ごとの玉の動き

このように、各地で在地の石材利用が進む中、鳥根県松江市の花仙山産碧玉が管玉に利用されるようになる。この碧玉は硬質で、直接打法や施溝分割技法ではうまく割ることができなかったが、鉄製工具の普及によって、利用できる環境が整っていた。

花仙山産の碧玉は、当初、鳥取県中・西部、鳥根県東部を中心に分布したが、弥生時代終末期から古墳時代前期前半になると、福岡県の城野遺跡や潤地頭給遺跡など北部九州にまで石材や製作技術が伝わる。弥生時代中期に北部九州で重宝された「菩提系碧玉」が、一定の空白期間を経て、弥生時代終末期には「花仙山産碧玉」に置き換わったと言える。

(2) 青谷上寺地遺跡の交流

先述したとおり、青谷上寺地遺跡では、弥生時代中期前葉から「菩提系碧玉」を用いた管玉製作が始まり、弥生時代中期中葉～後葉にはその盛期を迎えた。これは、消費地である北部九州と石材供給地である八日市地方遺跡の動向と連動している。つまり、北部九州で「菩提系碧玉」製の管玉の需要が高まるとともに北陸の八日市地方遺跡へその情報が伝達し、北陸から日本海沿岸を介して石材や製品が北部九州に供給されたと考えられる。一方、北部九州から北陸へは鉄器がもたらされた可能性がある。

このように、青谷上寺地遺跡

は北部九州と北陸地方の間を取り持つ重要な中継拠点だったと考えられる。青谷上寺地遺跡において、早い段階から骨角器加工の先端技術や多数の鉄器が認められるのも、このような背景があったためと想定される。

しかし、弥生時代後期になると、「菩提系碧玉」の供給地である八日市地方遺跡が衰退し、消費地の需要が満たされなくなった。そのため、各地では緑色凝灰岩等に材質転換を図るが、青谷上寺地遺跡ではそのような動きはほとんど認められない。花仙山産碧玉が北部九州にまで及ぶようになって、青谷上寺地遺跡ではほとんど利用されず、青谷上寺地遺跡における管玉製作は終焉を迎えた。おそらく、青谷上寺地遺跡よりも東の地域で、花仙山産碧玉の需要が少なかったため、あまり流通しなかったものと考えられる。

その後、青谷上寺地遺跡における「ものづくり」の中心は、木製品に移っていき、花卉高杯をはじめとする秀麗な木製品が、青谷上寺地遺跡の重要な交易品として日本海沿岸の各地にもたらされることになる。

【註】

(1) 現存していないが、本来存在した分割片を「a」という記号を用いて表現する。

【主要参考文献】

- 大賀克彦 2001「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』日本考古学会
- 河合章行編 2013a「青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告9 玉・玉作関連資料」鳥取県埋蔵文化財センター
- 河合章行編 2013b「日本海を行き交う弥生の宝石～青谷上寺地遺跡の交流をさぐる～」鳥取県埋蔵文化財センター
- 木下高子 2013「弥生時代の管玉と勾玉－消費地からみた生産と流通」『日本海を行き交う弥生の宝石～青谷上寺地遺跡の交流をさぐる～」鳥取県埋蔵文化財センター
- 小松譲編 2010「中原遺跡Ⅳ」佐賀県教育委員会
- 佐藤浩司 2012「北九州市城野遺跡玉作り工房の発見と今後の課題」『研究紀要』第26号（財）北九州市芸術文化振興財団 埋蔵文化財調査室
- 下濱貴子・宮田明 2013「八日市地方遺跡の生産と流通」『日本海を行き交う弥生の宝石～青谷上寺地遺跡の交流をさぐる～」鳥取県埋蔵文化財センター
- 寺村光晴 1966「古代玉作の研究」吉川弘文館
- 寺村光晴 1980「古代玉作形成史の研究」吉川弘文館
- 寺村光晴 2004「序説—玉作研究の現状と課題—」『日本玉作大観』吉川弘文館
- 馬場伸一郎 2006「弥生管玉作りの施溝分割技術」『季刊考古学』第94号 雄山閣
- 米田克彦 2008「山陰地方における弥生時代玉生産の変遷と地域的特徴」『山陰における弥生時代の鉄器と玉』第36回山陰考古学研究会事務局
- 米田克彦 2012「弥生時代における玉づくりの展開」『日本海を行き交う弥生の宝石～青谷上寺地遺跡の交流をさぐる～」鳥取県埋蔵文化財センター
- 薬科哲男 2013「石材等の原産地分析」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告9 玉・玉作関連資料』鳥取県埋蔵文化財センター

八日市地方遺跡の玉づくり

小松市埋蔵文化財センター

宮田 明

1 玉作りに必要な碧玉はどのくらい？

八日市地方遺跡から出土した碧玉の総重量は、最終的な集計で約544kgに上りました。集めた碧玉がすべて玉作りの材料に利用できるわけではなく、適当な大きさに割りながら石質が吟味されます。

このうち、玉作り工程の途中のものが約81kgあり、実際に玉作りに利用された碧玉は15%程度です。そして、集落に残っていた管玉はわずか32gです。実際に作られた管玉はもっと多かったでしょうが、重量で見比べると、天然石を材料とする玉作りの難しさがよくわかります。

ところで、実際に出土した碧玉の大部分は、集落内に保管されていたと思われるもの以外は廃棄されたと思われますが、一部は石鏃せきぞくに加工せんこうされたり穿孔具などに利用されました。玉以外の石器は、穿孔具や石鏃のほかには石斧や石包丁などもありますが、これらに利用された碧玉は約6kgです。

2 八日市地方遺跡の玉作り

北陸での玉作りは、福井平野から始まります。

最も古い玉作遺跡は瓶谷びんや在田遺跡で、弥生前期の終わり、出雲を中心に山陰地方で発展した西川津技法【技法①】で玉作が行われました。もともと軟らかい緑色凝灰岩を加工する技法でした。

次に、弥生中期のはじめ、今市岩畑遺跡いまいちいわばたでも玉作りが始まります。この遺跡は大中の湖技法【技法②】で玉作りが行われたと評価されていますが、この段階はまだ瑪瑙めいろうの打製石針が主流でした。

そして、現在の鞍掛山周辺くらかけやま（小松の菩提・滝ヶ原）で碧玉産地が発見されたことが契機となり、北陸での玉作りが八日市地方遺跡を中心に本格的に始まります。安山岩の磨製石針を採用した大中の湖技法【技法②】の玉作りも成立します。

この段階の玉作り遺跡として代表的なのは、福井平野では加戸下屋敷遺跡かどげやま、能登半島では吉崎・次場遺跡よしかぜです。この両遺跡の玉作りは、小松の菩提・滝ヶ原産の碧玉の供給を受けて行われたと考えられます。

八日市地方遺跡は碧玉を供給する拠点として重要ですが、加戸下屋敷遺跡は生産拠点の強化と生産力の向上の役割を担い、この時期に始まるヒスイ勾玉の生産に関しては、吉崎・次場遺跡が糸魚川産ヒスイ供給の中継点としての役割を担うなど、それぞれに立地の特性があり、地域のネットワークを活用して、弥生時代の玉作りは発展したといえるでしょう。

3 碧玉産地をめぐる

さて、ここまで小松市菩提・滝ヶ原の碧玉産地についてサラリと触れてきましたが、これが注目されるきっかけになったのが「女代南B群めしうみなみ」と呼ばれる碧玉です。これは、兵庫県豊岡市

あしうてんてんから
たまたに
の女代神社南遺跡出土玉作り資料にあたりますが、周辺に玉谷と言う産地がひかえているのにも拘らず玉谷産ではなく、産地不明とされた碧玉でした。しかも、西日本を中心に国内のかなり広い範囲に分布することが知られていました。

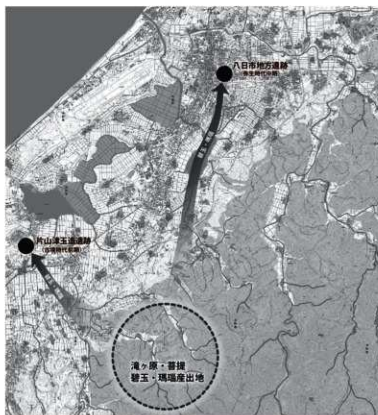
八日市地方遺跡の玉作り資料がこの「女代南B群」に判定されたことと小松市内に碧玉産地があることで、脚光を浴びることになった訳です。つまり、単純に「女代南B群」＝「八日市地方遺跡」とすると、八日市地方遺跡は国内の玉作りの大きな影響力を持っていたと言うことになります。

小松市内の碧玉産地は、主に那谷～菩提町にかけてと滝ヶ原町が知られていますが、地質的には鞍掛山を中心として碧玉が産出する地層が分布すると考えられています。

実際、那谷～菩提・滝ヶ原産の碧玉の成分を分析すると、「女代南B群」と一致するとは必ずしも言えない状況です。逆に、「女代南B群」が分布する地域には那谷～菩提・滝ヶ原産の碧玉も見いだされるようです。現在のところは「女代南B群」の碧玉を採取した場所が特定されていない状況ですが、今後周辺で発見される可能性を残しています。

(参考文献)

- 石川県立埋蔵文化財センター 1987『吉崎・次場遺跡 (第一分冊 資料編1)』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1988『吉崎・次場遺跡 (第二分冊 資料編2)』
- 小松市教育委員会 2003『八日市地方遺跡Ⅰ』
- 小松市教育委員会 2014『八日市地方遺跡Ⅱ 第3部製玉編 第4部木器編』
- 粕野義夫 1993『石川県地質誌』石川県
- 島根県立古代出雲歴史博物館 2009『輝く出雲ブランド 古代出雲の玉作り』
- 清水町教育委員会 2002『飯谷』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1988『下屋敷遺跡 堀江十楽遺跡』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008『今市岩畑遺跡』



玉作り遺跡と碧玉産地の位置関係

弥生中期の主な玉作り遺跡の分布



碧玉を産出する凝灰岩層

船野義夫 1993「石川県地質誌」より抜粋引用

碧玉・緑色凝灰岩重量集計表

分類	碧玉質岩(Gt)	緑色凝灰岩(Gt)
原石・加工礫等	142,150.40	5,569.53
石核類	84,951.32	216.68
折片	164,390.26	193.05
剥片	64,923.96	1,312.29
玉作り工程品	81,145.55	210.77
装身具(管玉等)	32.19	2.11
その他石器	6,261.72	3,366.74
合計	543,855.40	10,871.17

(単位：g)

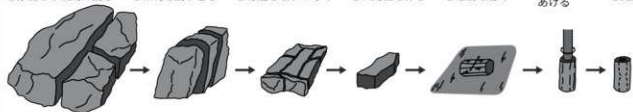
ヒスイ重量集計表

分類	硬玉(Jd)	軟玉(Np)
原石・加工礫等	3,812.27	339.72
石核類(タタキ石含む)	2,940.63	
剥片・礫片	2,984.90	122.31
玉作り工程品	1,003.25	233.28
装身具(勾玉等)	39.02	7.01
合計	10,780.07	702.32

(単位：g)

【技法①】 使用石材：緑色凝灰岩（軟質）、使用工具：石器、穿孔具：石針

- ①原石を不規則に割る ②素材を割りとる ③縁辺を取りのぞく ④四角柱を作る ⑤砥石で磨く ⑥石針で孔をあける ⑦完成



【技法①】 使用石材：緑色凝灰岩（軟質）、使用工具：石鋸、穿孔具：石針

- ①原石の縁を平らにする ②石鋸で側面に溝を切る ③溝に沿って割り、板状の素材を作る



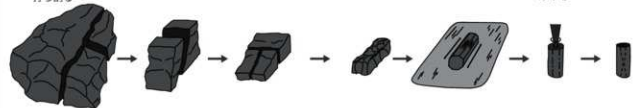
【技法②】 使用石材：碧玉（菩提・那谷・猿八産）、使用工具：石鋸、穿孔具：石針

- ①原石の表面を平らにする ②石鋸で溝を切って割り、立方体の素材を作る ③二等分割を繰り返し、直方体の素材をつくる ④側面を整形する ⑤砥石で磨く ⑥石針で孔をあける ⑦完成



【技法③】 使用石材：碧玉（花仙山産）・緑色凝灰岩（軟質）、使用工具：鉄器、穿孔具：鉄針

- ①原石を不規則に打ち割る ②素材を割りとる ③タガネ等で分割する ④側面を整形する ⑤砥石で磨く ⑥鉄針で孔をあける ⑦完成



補足資料

八日市地方遺跡とは

八日市地方遺跡は、昭和5年の発見以来、北陸を代表する弥生時代の遺跡として考古学界で注目を集め、第2次大戦後まもなく行われた学術調査で発見された土器は、北陸の櫛目文土器の代表として「小松式土器」と称されるなど、古くから小松の名を全国に広めた遺跡です。

平成5年、小松駅土地区画整理事業に伴い、8カ年にわたり実施した発掘調査によって、遺跡面積は10万㎡を超える多重環濠集落であることが判明し、出土品は数十万点という膨大な量に及びました。この出土品の内容は、広域な地域間交流を示すとともに、ヒスイ製勾玉、碧玉製管玉、木製の農耕具、容器類などの良好な製作工程資料が伴うこと、さらに多様な形態の祭祀具がみられるなど、北陸地方を代表する弥生時代中期の拠点集落の様相を示す一括資料と評価され、平成23年6月27日、1,020点が重要文化財の指定を受けました。

八日市地方遺跡の位置

石川県は、列島のほぼ中央に位置しており、日本海側の重要な中継点にあたります。日本海側に特徴的な大規模な拠点集落が位置するところは、潟湖を背景にもつ海上交通に適した場所であるといわれています。加賀地域のなかで、潟湖を背した箇所は、河北潟を背にもつ犀川右岸域と加賀三湖（今江潟、木場潟、柴山潟）を背にもつ梯川流域をあげることができます。そして、梯川流域の特徴は、梯川河口からはランドマークにあたる白山がみえ、この地に漂着するものだけでなく、継続した交通の目印になったことが想像できます。さらには、南に位置する東海地方との情報伝達に有利なのは縄文時代から続く白山環状ネットワークでの北陸ルートであり、美濃→勝山→大野→小松へと繋がります。これらのことから、梯川流域を含む小松市は、海・陸から広域な情報・流通できる箇所であったものと考えられます。



区分	豊内	八日市地方	集落	八日市地方遺跡の変遷			
縄文後期			0				
縄文晩期 弥生前期	I		1	埋積浅谷より、透瓦川式土器出土・土構は確認されず			
			2	散見的に遺物が、埋積浅谷よりみられるのみ			
弥生中期 前葉	II		3	↓ クヌギ・アベマキ等の貯蔵穴形成			
			4	環濠掘削開始 環濠集落の成立			
			5	I期 埋積浅谷肩部に木器貯蔵開始 人面付土器・鳥形土器・安曇堅柱出土			
弥生中期 中葉	III		6	環濠再掘削 居住域拡大	井戸 独立柱建物跡 平地式建物跡	木器生産	玉生産
			7	II期			
			8	↓			
弥生中期 後葉	IV		9	居住域縮小 武器類・絵画土器などの祭祀具隆盛			
			10	III期 埋積浅谷肩部に貝類・貯蔵穴(ヒシトチ等)形成 集落廃絶			
弥生後期	V			埋積浅谷がほぼ埋まった後、一部の肩部にて土器発見あり			土坑墓 方形周溝墓 造成

八日市地方遺跡の概要

弥生時代中期初頭にはナラ林やハンノキ林は減少し、イネ科の植物が増加したことが、遺跡の花粉分析の結果わかっています。これは、川辺に分布するハンノキ、ナラ林が切り開かれた場所にムラや水田などが作られたことを示し、環濠集落が形成されたものと考えられます。

集落の変遷は大まかに3時期に分けることができ、おおよそ弥生時代中期前葉、中葉、後葉になります。

〔1期〕

西日本から伝わる櫛描文土器と中部地方に分布する条痕文土器がみられることから、西から移動してきた人々と在地の人々が共存してムラ作りを行ったものと考えられます。この段階から、木器生産と玉作りが徐々に始まりました。

〔2期〕

ムラの発展期になります。土器は条痕文土器が姿を消し、条痕文土器の要素を取り入れた北陸独自の櫛描文土器「小松式土器」が成立します。

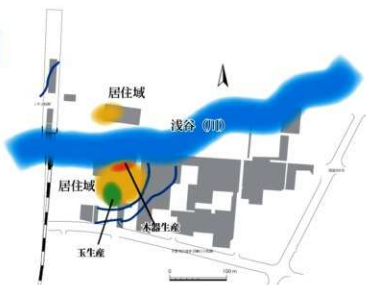
土壌分析の結果、乾燥を好み、人里植物の性格をもつヨモギ属、アカザ科・ヒユ科などの草本が増加し、寄生虫の卵が多くみられることからムラの拡大と人口増加が窺われます。

ムラは多重に環濠がめぐり井戸や建物跡が複数みることができ、また、方形周溝墓とよばれる溝に囲まれた方形の低墳丘墓が、居住域の外縁に作られるようになります。

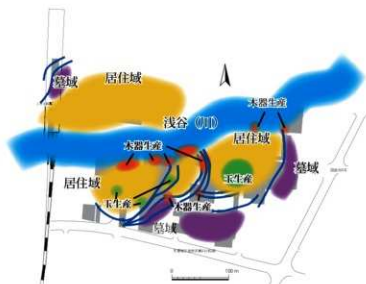
〔3期〕

西方から凹線文土器が波及します。

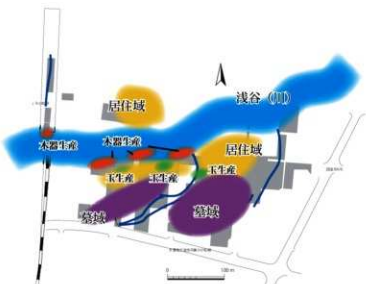
ムラは縮小方向へと向かい、居住域であった個所は次第に墓域へと変化します。遺跡からはまつりの道具や武器・武具が顕著にみられるようになります。



集落1期



集落2期



集落3期

フォーラム

日本海を行き交う弥生の宝石 in 小松

発行日 平成 26 年 10 月 10 日

発 行 小松市・小松市教育委員会

編 集 小松市埋蔵文化財センター
〒923-0075

石川県小松市原町ト 77-8

TEL 0761-47-5713